

---

# t e a r ~ あの日約束 ~

彩音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

tearのあの日の約束

### 【Nコード】

N5044T

### 【作者名】

彩音

### 【あらすじ】

『 やつと、君に会えるよ 』

“ 私は、もう、誰も信じない…”

そう誓った少女、琴奈はある日突然、“力を持ちし者”として、魔王を倒すための“異界からの訪問者”という名で異世界に呼ばれる。

『 この力は誰にも知られるわけにはいかない

… 』

『 もう…一人は嫌…! 』

『俺が、君を守るよ』

真実を知ったとき、少女はどうするのだ

るじゅ…

『私も…あなたに会いたかった…』

一人の少女をめぐって、過去と真実、そして心が交差し

ていく…!!

書き始め2010,9,5

この作品は、別のサイトで執筆しているものです。

そのサイトで執筆したものを順次更新していく予定です。

## プロローグ

「時は満ちた」

コツツ……というグラスの音と共に甘く低い声が、静かな空間に響く。

薄暗い部屋の中、黒いコートを着て赤いワインが入ったグラスを持った男は、その美しい容貌を緩め、口角を上げた。

「ククツ……。やっと……やっと会えるよ。早く会いたいなあ」

クククツ……と男は笑いながら、グラスの中身をいつきに喉に流し込んだ。

大きな窓の外では、紅く大きな月が薄気味悪く光り、その冷たくも美しい容貌を照らしていた……。

“力を持ちし者” 1

「……何、こじ…」

私は、ぽつりと呟いた。

私は今、薄暗い部屋の中、何か不思議な文字と模様の円……そう、例えるなら魔法陣のようなものの上に座り込んでいる。

そして、前には大きな白いローブを着た私と同じくらいの女の子が、驚いた顔をして、私を凝視している。女の子の後ろには、同じ格好をした大人が数人と、何だか身分の高そうなきれいな服を着た人が3人いる。そして、その横には騎士のような格好をした人がちらほら……。

…駄目だ、全然理解できない。

そもそも、私はついさっきまで学校から家に帰っていたのだ。どう間違っても、こんな気味の悪い場所に迷い込むことはない。

そう、今日もいつもどおり、あの公園をぬけて桜の綺麗な通りを歩いてた。

そしたら……そうだ。突然強い風が吹いて、私を中心に渦巻くように花びらが舞ったから、思わず目をつぶったんだ。

それで、目を開けたらここにいて……。

そのとき、静まり返っていたこの場所の奥から、突然男の人の声が聞こえた。

「……どういうことだ？失敗したのか!？」

その声をきき、その場はいっきにざわついていく。

「確か、召喚条件は“力を持ちし者”だったはず……。

しかし……あれはまだ少女ではないか!あれのどこに力を持っているというのだ!？」

戦えば、すぐに負けてしまいそうではないか!！」

「そうだ、そうだ!！どうみても弱そうだ。

もしや……失敗したのか!？」

「いや、しかし……。今回召喚を行ったのは、あの“リリー”殿だぞ？失敗なんて……なあ」

「だが、現に失敗しているではないか!！」

だから私は反対したんだ!！いくら魔術師としてすばらしい功績を残しているとしても、まだ19やそこの小娘に、国の大事を任せるなど!！」

段々と声は激しくなり、白熱した空気がその場所を支配していく。

……召喚？ 魔術師？

私は今、とてつもなく混乱している。

この人達…何言ってるの？ 頭おかしいんじゃないの？

意味分かんない…。誰でもいいから、この状況教えてよ…。

そんなことを考えていた私の耳に、一度大きな声が聞こえた。

「ならば！！ 試してみればよいではないか！！？」

ザワツ…。その場が一つの波のようにざわついた。

そうだ、そうだ…。そんな声がちらほら聞こえ、一人、二人と白いローブを着た人達はゆっくりと私のほうを向いていく。ドクンツ…

！！

ふいに、昔の映像が重なる。

『うわぁ…こっちに来んな。化け物！！』

『えー…。なんで私がああな化け物に近づかなきゃならないのよ…。だれか、係代わってよ』

『俺らだって嫌だぜ？ あんな独り言の多い薄気味悪い奴なんか』

嫌……。やめてえっ!!

あいつらと同じ…冷たい目で私を見ないで……!!

私の体は震えだし、呼吸も乱れていく。心臓もこれでもかというようにドクン、ドクンと暴れだす。

「はっ……ああ。ひっ……」

突然呼吸が乱れ始めた少女を不審に思い、一人の男性が近づいていく。

「おい…、どうし…」

「来ないで!!……!!」

少女が叫ぶと突然、少女から放たれた真っ白な強い光りが、薄暗かった部屋を一瞬にして照らしていく。

「かつ…はあ!何だ…こ…これは!?!」

その場にいた人々は、その光にたえられず、召喚を行った少女を残して皆倒れていく。

そして、2、3分後にその光が消えていった。  
その場には、汗だくの、苦痛に満ちた顔の少女が一人横たわっていた。

“力を持ちし者” 2

「…マジかよ…」

この様子を隣の部屋からガラス越しに見ていた俺は、目を極限まで見開き、黒髪の少女を凝視していた。

さっきのあの光…。あれは聖なる力で満ち溢れていた。

あそこまで強く、美しい光は俺でも見たことがない。

あれはまるで…本物の天使の力のよう…。

「フツ……。ハハハツ…!!」

突然笑い出した俺に気づき、呆然と少女を見つめていた、この国の王と王妃が意識を取り戻した。

「どうしたんだ…ジン。突然笑い出したりして」

「だってさ…、見た？さっきの光…。

あの聖なる光…。魔力の大きさ。

召喚は失敗なんかじゃない。それどころか、大成功だ。ハハツ…。

國中搜したって、あんなに大きな力を持つ者なんてそうはいない。

あの少女の力があれば…きっと、あいつだって倒すことが出来る」

俺はそう力強く言うと、二人のほうを向いて笑った。

「そうだな…。お前に任せれば、きっと上手くいくな」

「ええ…。そうよね。私達の自慢の息子なんですもの」

そう言った二人に、俺は笑みをこぼし、少女のほうへ足を進めた。

警戒して少女に近づくと、気を失っていることを確認し、少女を抱き上げた。

細いな…。こいつちゃんと食べてんのか？

そんなことを思いながら、少女の顔を覗く。

サラツ…。少女の長い、目を隠していた前髪がずれ、その顔があらわになる。

っ  
…!!

その顔を見て、しばらく硬直した。

そんな息子を見て、不審に思った王が声をかける。

「どつした？何かあったのか？」

その声で我に返った俺は、ハツとしても来た道に戻っていった。

やばい……。これは予想外だ…。

長い前髪に隠された少女の顔は、この世のものとは思えないほど、美しかった。

まさに…“天使”だな…。

足を止め、ふと、緑色の髪を肩くらいまで伸ばした少女に声をかける。

「リリー」

その声に、さっきまで少女のいた場所をじっと見つめていた少女は、困惑した表情をこちらに向けた。

「ジン…」

「成功だよ」

「え…?」

「だから、大成功。彼女はまさに、“力を持ちし者”だよ。お疲れさん」

呆然と、まだ状況を理解出来てないリリーに、一言告げる。

「その周りで寝てる皆さんを、起こしといてくれる？」

その言葉に、周りを見渡したリリーは、慌てて気絶している人々を  
起こしにかかった。

そんなリリーを横目に、クスツと笑った俺は、満足げに部屋の入口  
へと足を進めていった。

『…ち…めて…目…め…』

「んっ……」

誰…？

私はゆっくりと目を開けた。視界にはクリーム色の壁紙が広がっている。

体を起こし、部屋中を見渡すが私の他には誰もいない。

空耳かなあ…？優しい女の人の声…。どこか懐かしいような……。

思い出せそうで、思い出せず、胸の奥に何かもやもやとしたものが重なっていく。

ふと、もう一度周りを見渡した。

ここどこ…？私の部屋…じゃないし。

必死に思いだそうと頭を抱えていたとき、部屋の奥からガチャリッ…というドアが開くような音がした。

「ん…？なんだ、目が覚めたのか」

その声に、一瞬ビクツとした私は恐る恐るドアのあるほうを向いた。

そこには、右手に果物らしきものが入っているかごを抱えた、男の人が立っていた。

きれいな銀髪を揺らし、海底のような深い青色の目を細めながら、その男の人は私に向かって微笑んだ。外国人……？そういえば、この部屋も西洋っぽい造りをしている。

「だ…だれ…？」

恐る恐るその男の人に尋ねると、その男の人は驚いたように私を見つめ、一言もらなかった。

「君は…クレイジエント語が話せるのかい？」

はい…？何言ってるの、この人……。

「クレ…？い、いえ私は…日本語しか話せませんが……」

呟くように返すと、その男の人は眉を寄せ、怪訝そうに私を見つめながら何か呟いていた。

「まだ、翻訳の魔法はかけていないはず…。そういえば、あの時も、クレイジエント語で叫んでいた……。なぜ、異世界の者がこちらの言葉を話せるんだ？ ……これも、“力”の一つということか…」

いまだぶつぶつと言っている男の人を見つめ、私は混乱していた。

そのとき、突然、少女特有の可愛らしい声が聞こえた。

「ジンッ…!!まだあ!？」

そう言いながら、元気よさげに一人の少女が部屋に入って来た。

「あっ…悪い、リリー。忘れてた」

「えー何それー。いって言うまで入るなって言ったのジンじゃん  
!！」

そう不満げに零す少女に驚いていると、私を確認した少女が笑顔で駆け寄って来た。

「はじめまして、“天使”様。  
私はリリー＝マディリア、19歳。一応、魔術師だよ」

「天使……？」

何それ……。私は人間だよ？天使なんかじゃない。そんな、綺麗な者じゃない……。

「ああ、それはね。あの光が、まるで天使のようだったから……。その……まだ、あなたの名前が分からなかったから、私達の間ではそう呼んでたの。  
気に障ったのならごめんね」

光……何のこと？

困惑している私に気づかず、リリーは更に続けた。

「あの時はごめんなさい。まさか、召喚であなたのような少女が喚ばれるなんて思ってたなくて、皆混乱してたの。あの時のことは、私が代表して謝るわ。ごめんなさいね。  
でも、皆あの光を見て、あなたの“力”のこと認めていたから、もう大丈夫よ」

そう言うと、リリーは私に向かってニコツと笑った。

そのとき、突然、目の前にいる少女と同じ顔の少女が、私を見て目を見開いている映像が脳をかすめた。

それと同時に、私を見て冷たい目をしている人々の顔が、次々と頭の中を駆け巡る。

「ひっ……!!」

「……え？」

突然、顔を青くして何かから逃げるように後ずさっている少女を見て、リリーは困惑した。

ついさっきまで、普通だったのに……。

しかし、今ではまるで蛇に睨まれた蛙のように、恐怖に染まった目で私を見ている。

何が、少女をこんなに変えたの……？

だが、そんなリリーの様子に気づかず、少女は逃げ道を探していた。

そうだ……。人間なんて、誰も信じられない……!

自分の身は自分で守らなきゃ……!!



「くっ…これ…は…!？」

「っきゃあああ…!！」

その光は強風を吐き出しながら、少女を守るかのように少女を中心に球型に輝いていた。

飛ばされそうになるのを必死に我慢し、二人は顔を歪ませながら少女を見つめた。

そして…二人は気づいた。

漆黒で艶やかな、腰まである少女の髪が、淡い金色に輝き、その瞳は深い森のような美しい緑色に染まっているのを…。

綺麗だ…。

こんな状況にもかかわらず、ジンはそう思ってしまった。  
真っ白な光に包まれたその姿は、まさに、地上に降り立った天使のようだと……。

そのとき、廊下から何人もの人々が駆ける足音、そして、ドンドン  
っというドアを叩く音と男性の大声が聞こえた。

「ジンッ…!!大丈夫か!？」

さっきこの部屋からすごい音が聞こえたぞ!!それに、部屋から強い光りがもれてるって、庭師が慌ててたぞ!?!  
天使が目覚めたのか!?!」

「クッ…来るな、イリス!!」

お前ではこの光は堪えられん!!  
俺は無事だから、お前はそこで、混乱を抑えていてくれ!!」

「分かった…!!怪我すんじゃないぞっ!!」

「ああ…。ありがとな」

そう応えると、ジンは少女のほうへ向き直った。

「あつ…ああ…。いやっ…いやあ…。」

少女は美しい光を放ちながら、何かに怯えているように下を向き、頭を振っていた。

その様子を痛ましそうに見つめていたジンは、意を決して少女へと近づいていく。

それに気づいた少女は、いつそう光を強めて、ジンの行く手を防ぐ。応援を頼もうと、リリーを見たジンは、彼女が気を失っているのに気づき、小さくため息をつく。

仕方なく少女のほうへ向き直ったジンは、気づいた。

少女の、全てを拒絶するような目から流れる、一筋の涙が、頬を伝っていたことに。

その刹那。ジンは体の奥から込み上げる、何ともいえない熱いものを感じた。

と、同時に、気づくと少女を抱きしめていた。

\* \* \*

「ひっ……！！」

私は混乱していた。

傷つく前に逃げなきゃ……。

そう思った私は、目の前にいる少女から逃れようと、逃げ道を探していた。

だけど、突然後ろのほうにいた男の人が、何か声を荒げながら、こっちに近づいてきた。

それが、重なった。

私を見下して、笑い、冷たい目を向けていた、あいつらの姿と……。

その瞬間 ……。

胸の奥から、温かくて強い、大きな力が込み上げてくるのを感じた。

その光は、なぜか恐いとは感じなかった。私に従い、守ってくれる温かな光 ……。

だから、私は目の前の男性に怯えながらも、本能的に“大丈夫だ”と感じていた。

だから……。気づきながらも防ぐことができなかった。  
その男の人が、私に触れたことを。

……一瞬、息をするのを忘れた。

そして、身体の中から溢れ出てくる恐怖という感情のため、平静を保てなかった。

「イツ……ヤアアアアアア　　！！！！！」

少女の叫びとともに、少女の魔力……そして光が急激に膨らみ、針のように尖り、ジンの全身をいつきに刺した。

「カ……ハアツ……！！！」

これはやばい……。本能がそう告げているのを感じた。  
だが、俺は少女を放さなかった。

……いや、放せなかった。大きな力を発しながらも、今にも消えてしまっただけだから。

そしてなぜか……この少女を“守りたい”と思ってしまった。

どうして、そんなにも人に怯えているんだ？  
どうして、そんなに悲しい目をしているんだ？

知りたい…もっと、君のことが知りたい。  
ただ純粹に、本当の君が知りたかったんだ…。

動きが鈍くなった体をどうにか動かしながら、ジンは少女の顔を上  
に向かせ、目を隠していた前髪を掃った。

少女は一瞬硬直するが、必死にジンから顔を背けようとする。

「やだあ…。み…ない…でえ…」

弱々しい声を出しながら、ますます光を強めていく。

ジンは苦痛に満ちた顔を更に歪ませるが、それを必死に抑え込み、  
無理矢理少女の頬を掴み、自分の方に向けさせた。

少女の目には、恐怖の色がありありと映し出されていたが、どこか、  
虚ろな目をしていた。

ジンは少女を正気に戻すため、必死に声をかける。

「俺の目を見る」

そう言っつて顔を近づけていく。すると、虚ろだった少女の目は一瞬見開かれると、恐怖の色が顔全体に広がり、今にも倒れそうなほど青ざめていった。

「ひつ……。う……。ああ……。いや……。ああ!!」

真っ白な光が、また一段と激しくなっていく。

しかし、ジンは少女から顔をそらさなかった。

「俺は君を傷つけない!!」

ここにいる人も…君の敵じゃ…クツ…ないっ…!!

もし…君を傷つけようとするやつがいても、俺が…!君を…守るか  
ら…!!

だから、俺を信じてくれ!!」

力をこめたジンの言葉に、少女は一瞬困惑した表情を浮かべた。そして少女を守っていた光も一瞬弱まる。

すると突然、少女は力を失ったようにぐったりと倒れていった。それを素早く受け止めると、ジンは息を吐いた。

「おい…。大丈夫か…？」

そう声をかけると、少女は淡く光り出し、ゆっくりと立ち上がった。

そこには、先程とはまるで別人の、穏やかな表情を浮かべた少女がいた。

先程までとの雰囲気の違いにとまどっているジンを確認すると、少女はゆっくりと微笑んだ。

『この娘を止めてくれてありがとう、ノアード国の王子様。  
あなたが力の暴走を弱めてくれたおかげで、私が抑えさせることが  
できたわ』

しかし、少女から発せられた声は、少女とは違う、高く綺麗な  
声だった。

『この娘を頼みます。この娘は…いずれ、大いなる決断を迫られる  
ことになるでしょう。そのために、この娘は傷つき、“力”に押し  
潰されそうになるかも知れません。  
そんなとき、この娘を支える者が必要です。』

…あなたは信じられる気がします。

汚れを知らない人間よ…。あなたに、真実を受け止め、この娘の全てを背負っていく覚悟はありますか？』

困惑しているジンに向かって、力強く発せられる女性の声。

ジンは困惑しながらも、力強く応えた。

「はい。俺はこの地を守りし神に誓います。この少女を守りゆくことを」

その言葉を聞くと、少女は顔を緩ませながら、光の粒を上に向かって放出させていった。

『力強い目…。あなたなら、きっと大丈夫ね。  
では、この娘を頼みます…』

その声とともに、少女の周りで光っていた光の粒は全て消え、またもや力を失いぐったりとしている少女を抱え、無事かどうか確認する。

そして、ジンは光の消えさった方向を呆然と見つめていた。

「ジン…？もう終わったのか？」

ドアの外から聞こえたその声で、我にかえったジンはゆっくりと息を吐いた。

「ああ、もういいぞ…イリス。  
ご苦労だった」

「ああ…。しかし、この部屋…すごいな。  
いったい、何があったんだ？」

そう、この部屋はまるで台風にあったかのように、家具は倒れ、本や花瓶などはぐちゃぐちゃに床に散らばっていた。

その惨状を見て、顔を引きつらせながら部屋に入ってきたイリスは、その原因である少女をチラ見しながらそうぼそつと呟いた。

「……………た…かもし…ん……………」

「はあ…？？」

ぼつりと呟いたジンの言葉は、イリスには届かず、イリスは思わず聞き返した。

「俺達は…もしかしたら、とんでもない者を召喚してしまったのか  
もしれない……」

ジンの言葉を聞き、イリスはハハツと乾いた笑みを浮かべながら、  
少し手前で気を失っている緑髪の少女へと目を移した。

ジンは、黒髪に戻った少女を見つめながら、先程の出来事を思い出  
す。

……あの女性の声は、いつたい……。

重たい空気が支配する中、黒髪の少女だけが、穏やかな表情を浮か  
べていた。

異世界\*クレイジエント 十 白光十

そこは、限りなく白い空間だった。

「んっ……。……え？こっ……」

私は目覚めると、またもや知らない場所にいた。  
そこは、何もないただ真っ白な世界が広がっていた。

なぜだろう……。なぜか、穏やかな気持ちになる。  
そんなことを考えていると、誰もいないはずの空間から、きれいな  
ソプラノの声が響いた。

『目が覚めたの？ティア』

突然聞こえてきた声に驚き、声がした方向に目をやると、そこには、  
長く、ウェーブのかかった美しい金髪を足元で揺らし、深く、輝い  
ている緑目の優しい微笑みを浮かべた女性が一人、佇んでいた。  
困惑している私を見て、少し悲しげに笑ったその女性は、ゆっくり  
と近づいてきて私を優しく抱きしめた。

『辛かったわよね……。ティア。もう、大丈夫だから。』

今まで、本当にごめんなさいね』

そう言いながら、少し体を震わせている女性に気づき、体を強張らせていた私は、なぜか緊張が解け、体の力が抜けていくのを感じた。

フワリ、と柔らかな甘い香りが鼻をくすぐる。初めて匂った香りのはずなのに、どこか懐かしく感じる。それは、とても曖昧で、しかし真実であるかのように心臓がトクンツと反応する。本能的に、その香りに奮え喜んでいいる私がいる。

この声…あの時と、同じ…。

そう思いながら、自分らしくない反応に戸惑っていた。

どうして…？いつもの私なら、知らない人が近づいてくるだけで、体が拒絶して受け付けないのに。

それなのに…初めて会った女性に、安心している私がいる。

ダメだよ…。こんなんじゃ…。また、簡単に人を信用しちゃ…。

そう言っって抵抗したいのに、心が“違う”と訴えてくる。

この女性は、信用出来る…と。

「…だ…れですか…？」

やっとの思いで出した私の一言を聞き、一瞬、体を強張らせた女性は、ゆっくりと体を起こし、じっと私を見つめもう一度深く抱きしめた。

その時、私は見てしまった。

美しく、吸い込まれそうな瞳に、うっすらと涙を浮かべ、苦しげに歪ませていた女性の顔を。

『ごめんなさい……。あなたを、一人にしてしまって。辛い思いをさせてしまって。本当に……』

でも、もう少しだけ待ってほしいの。まだ、“その時”ではないの。

まだ、何も知らなくていいから……』

眩くような、震えた声を聞き、困惑していた私はハツとしたかのように、その女性を見て、震える声を必死に抑えながら口を開いた。

「あ……あなたは……私を……知っている……の……？」

私は何者なのか……知っている……とい……うの……！？」

息が上手く出来ないほど、心臓がドクンッ、ドクンッと暴れ出し、異様な高揚を感じる。

その女性が口を開くのを、今か今かと待ち構えていると、その女性はやゆっくりと私を放し、今にも消えそうな笑みを浮かべた。

『まだ、その時ではないの……。それしか、今はまだ言えないわ。心配しないで。そう遠くない未来で、全て分かるから。今はまだ……純粋な目で世界を見渡してほしいの。そして……真実を見極めて。あなたには、あなたの真実を見つけてほしいの。』

そう言うと、その女性から真っ白な光が溢れ出し、私の視界を埋め尽くす。

私はその光に意識を失いそうになるのを我慢し、その女性に手を伸ばす。

しかし、そんな私を嘲るかのように、光は強くなり、その女性の姿は見えなくなっていく。

「まっ……てえ……!!」

顔を歪ませながら、必死に手を伸ばす。

今、あの人を見失ってしまったてはいけない、と思った。

私のことを知っているかのようなそぶりを見せる人……。

何でもいい……何でもいいから。お願い……教えてよ……。

私が何者なのか……。

しかし、それ以上に。

今見失ったら……手を放したら……。

もう二度と、会えなくなる気がした……。

しかし、そんな私の意志に逆らい、私の意識は朦朧としてくる。  
世界が真っ白に染められていき、力も抜け、何も考えられなくなる。

フワリッ…と、意識がなくなりかけた時に、甘い香りが広がる。

『ごめんね…ティア。』

私の愛しい ……』

その言葉を聞き終える前に、プツリと私の意識は途絶えた……。

「まっ……………!!」

ガバツと私は勢いよく体を起こした。

そこには、あの女性の姿は見えず、代わりに二人の男性と一人の少女が少し緊張したように私を見ていた。

「えっ…?あ……………」

そこで、私はそのうちの二人に見覚えがあることに気づいた。無意識のうちに体を強張らせ、手を後ろのほうに伸ばしていると、それを見た銀髪の男性が慌てたように私の手を掴んだ。

「俺達は君の敵じゃない。何も危害を加えるつもりはないんだ。信じてくれ」

一瞬ビクツとした私は、その男性から離れようと必死に手を動かす。しかし、その男性の強く、意志を持った目を見て、フツと力が抜けるのを感じた。

ああ…この人は違う …。

あいつらとは違って、私を蔑むような目で見ていない……………。

そんな私の様子を見て、三人は緊張が解け、安心したような様子を見せる。

「落ち着いてくれてよかった…」。

すまなかった。突然知らぬ土地に連れて来てしまったというのに、君に失礼をはたらいてしまったようで。

しかし、彼らも反省をしている。許してやってはくれないか？」

そう言いながら、軽く目の前の男性が頭を下げると、後ろの男性と少女もゆっくりと頭を下げる。

それを見た私は慌てて口を開いた。

「あ…えっと、私もすみませんでした…」。

その……混乱してて……迷惑をかけました」

「いや、君が謝ることはない。

それより、自己紹介がまだだったな。

俺はノアード国第一王子のジン＝ノアードという。

歳は23だ。気軽にジンと呼んでくれ」

「……王子様？」

つい、言葉をもらしてしまった。

確かに、綺麗な銀髪に青目、整った顔立ち。それに高そうな上品な服…。

どうみてもそれなりの家柄って感じだけど、王子様って…。まあ、日本ではないだろうなって思ってたけど。でもノアード国なんて聞いたこともないし…。そもそも、外国人でも銀髪の人なんて、地球にいただらうか。

そんなことを考えていると、後ろにいた赤髪、茶目の男性が私達の間を割って入って来た。

「オイオイ…。俺達も入れるよ、ジン。」

…はじめまして、お嬢さん。

俺はイリス＝レアリエント。ジンと同じ二十三歳で、王国直屬部隊の隊長をやらせてもらってるんだ。

ジンとは、一応親友兼 幼なじみ 兼 専属護衛ってところかな？あ、俺のことイリスって呼び捨てで呼んでね？

それよりもお嬢さん。あなたの名前を覚えてもらえるかな？」

そう言って、私に向けられる笑顔に戸惑っていると、バコツというすごい音が響いた。

「何驚かしてんのよ…。」

ごめんなさいね？この馬鹿が迷惑かけて。

さっきも言ったけど、私はリリー＝マディリアよ。リリーって呼んでね？

歳は十九で、魔術師をしてるよ。私達昔からの付き合いで、よく一緒にいるの」

「ちよっ…お前、リリー何してんだよ！！危うく頭が割れるとこだ



その言葉に、私はやつぱり…と思った。

だって、そうじゃなきゃつじつまが合わないことが多過ぎだもの。

……そっか。ここはあの世界とは違うのか ……。

少し複雑そうな表情を見せる琴奈に、ジンは一瞬口を開くのをためらったが、すぐに何もなかったかのように続けた。

「この世界 クレイジエントは人間の生きる世界…別名“人間界”  
と言われ、その他に天使や神が生きる“天界”……そして、悪魔な  
どの魔物が生きる“魔界”があるんだ。

次に、この世界“クレイジエント”は主に4つの国に分かれている。

北に、技術の大国“ラジニア”

南に、緑の大国“グリシア”

西に、文化の大国“シャメルン”

そして、今俺達がいる、東にある魔術の大国“ノアード”だ。

それと、世界の状況を見守り、管理するための“世界政府”があり、  
各国の王はその最上層部に所属している。

ここまでではいいか？」

そこまで言っただけで区切ったジンは、軽く頷く私を見て少し息を吐いた。

「……ここで、少し昔話をしようか」

ジンはそう切り出すと、私から視線を下にずらしながら、顔に影を  
落としていく。

「…まあ、昔っていつても、最早伝説のようなものだがな。

約五百年前、この世界は今のように三つの世界が閉ざされてなくて、お互いに干渉出来る状況だったんだ。

そのせいで……争いが起きた。

それが、後に“人魔世界大戦”と呼ばれる、人間と魔族による戦争だったんだ。

…当時は、魔界から多くの魔物や魔族 人型をとれる高位の魔物達が人間界に押し入って、多くの被害が出ていた。

そこで、人間と天界の者が手を取り合って、魔界を統べる魔王という者を倒そうとした。

天界からは、癒しの女神の娘である大天使セシリアとその部隊、人間界からは世界政府直属特殊部隊の者が選ばれた。

…しかし、戦いは難航した。当時の魔王は歴代最高の力を持つと言われていたからな。簡単には倒すことが出来なかったらしい。

そして、遂にまともに戦える者はセシリアだけになってしまった。

セシリアは魔王を倒すために、他の生き残りを逃がし、一人で立ち向かったそうだ。

そして、多くの犠牲をはらった戦争は終わった。

生き残った兵士は、セシリアに強制転移されてしまったため、彼女がどうなったかは分からなかったらしい。

その後、魔物による被害は嘘のように激減した。

そして、結局彼女は戻ってこなかった。

そのことを受けて、世界政府は『大天使セシリアは命を懸けて魔王を討ち取り、我等人間を救ってくれたのだ』と発表した。その後、人間界と魔界を隔離するための壁が造られ、大天使セシリアは英雄として讃えられた。

彼女のおかげで、その後も世界は平和を保っていた。

しかし…」

真剣な顔になったジンがゆっくりと顔を上げ、私と目を合わせた。そして重そうに口を開く。

「十年前、不吉な予言がされた。

“今から約十年後…。世界は闇に包まれ、再び戦いの火蓋が切られるだろう。”

そして、異界からの訪問者により、世界の行方は決まるだろう”と。

…初めは誰もがその言葉を疑った。しかし、その予言をしたのはこ

の国一番の巫女だったため、波紋は広がっていった。

そして、三年前、再び魔物が人間を襲うようになった。

そこで、世界政府直属の兵士が魔界を調査しにいった。

すると、五十人いたはずの部隊はほぼ全滅し、命からがら戻ってきた兵士は驚愕の事実を述べた。

“魔王が、再び現れた”と……。

その言葉に世界中が絶望した。

しかし、人々には一つの希望があった。

それが……あの予言の中に出てきた“異界からの訪問者”だ。

そして昨日……その予言に従って、異界から、魔王に対抗出来るような“力を持ちし者”を召喚した。

それが、君だ。……コトナ」

\* \* \*

真剣な目で見つめられ、私は混乱していた。

魔王？天使？戦争…予言…？

私が……この世界の行方を決める者……？

ダメだ……頭がパンクしそう。

確実に、許容範囲を越している。話のスケールが大きすぎるのだ。

そんな私を見て、ジンはためらうように口を開く。

「君のような少女に、こんなことを頼むのは間違っていると分かっている。

しかし……こちらも、もう頼るものが無いんだ。

……我々に、君の力を貸してくれないか……？」

その言葉に、今まで沈黙を続けていた琴奈がポツリと言葉を零す。

「無理、だよ」

「しかし……」

「無理だよ……!!あなたたち……おかしいんじゃないの……!!？」

私みたいな小娘に世界を救えみたいな、そんなこと……

出来るわけじゃない!!」

そう言っつて顔を歪ませる琴奈に、ジンは言葉を詰まらせる。

「第一、召喚自体失敗だったんじゃないの!？」

私は……戦えるような力は何一つ持っていない!!」

私に…何も、求めないですよ…!!」

その言葉に、琴奈を見ていた三人は驚いた表情を見せる。

「もしかして…自覚が無いのか？」

ジン達の頭の中に思い出されるのは、つい先程の映像。

そう、目の前の少女　琴奈が、真っ白な光を放ち、神々しいオーラを纏っていたあの場面だ。

あんなことをしていて、力が無い　？

「しかし…君は、真っ白な光を何度も放っていた。あれはまさしく魔王に対抗出来る“力”だ。

覚えていないのか？」

そう言われ、琴奈は一瞬目を見開くが、また戸惑ったような顔を見せながら、まるで自分に言い聞かせるかのように言葉を零す。

「…知らない…。知らないよ…そんな、光なんて…。

だって、私は向こうにいたときは、そんな力使ったことなかったもの!!何かの間違いよ…!!

それに…この世界のことなんて、私には関係無いじゃない!? どうして…。どうして…? ?

私…私は、ただ…。」

そう言って、だんだんと弱々しい声を出しながら、涙を浮かべる琴奈に三人は声をかけられなかった。

しばらく琴奈の泣き声だけがその場を支配していたが、そんな様子を見て、イリスがジンに声をかけた。

「今日は…コトナも疲れているだろうし。  
休ませてやらないか…？」

その言葉に、ハツとしたようにイリスを見たジンに、イリスは少し微笑みながら声をかける。

「…お前が焦る気持ちはよく分かる。  
だが…コトナの様子をしてみるよ。……続きは落ち着いてからの方がいい。お前だって、酷い顔してるぞ…？」

「…そうだな。焦ったって上手くいくとは限らないしな」

そう言って、今だ嗚咽を漏らす琴奈に顔を向け、ゆっくりと口を開く。

「…すまなかった。いろいろあつて疲れただろうに、君のことを考えずに、無理をさせてしまったな。今日はゆっくり休むといい。  
この部屋は…一応、君の部屋となっている。自由に使ってくれ。そ

れと、もし何か不備があればドアのそばにいる兵士に声をかけてくれ。すぐに手配しよう。

……力のことは、明日、詳しく調べるとしよう」

そう言うと、ジンは後の二人に目で合図し、静かに部屋から出ていった。

バタンツというドアの閉まる音が響き、静寂に包まれていく。

そして、少女の苦しげな声だけが、消えることなくその場に響いていた。

ダンッ…!!

「クソッ……」

傷つけるつもりは、なかった。

あんな不安定なコトナに告げるには、重すぎる内容だとは思っていた。

しかし…仕方がなかった。ああするしか、他に方法がなかった。分かってはいる…。酷な内容だとしても、この世界を救うためには、コトナの協力は不可欠だ。残された時間ももう少ない。だから、真実を伝えることは必要だった。

次期国王として、正しい判断だったと思っている。

分かっている…分かっているんだ。

だけど…今すぐ、伝えなければならなかったのか…?

もう少し、落ち着いてからのほうがよかったのではないのか…?

あの少女の コトナの涙に濡れた顔を見てしまい、決心が揺らぐ。

今でもまだ…コトナの悲痛な叫びが心に響いているから…。

「…私の、せいだ……」

そんなジンの葛藤の中、ポツリと言葉が落ちる。

「私…何も、できなかった。」

召喚の時も、さっきも…コトナが暴走した時、何もすることができなかった……。

私が、召喚しちゃったのに……。

あんな…まだ、私よりも年下で、不安定な少女に全て押し付けて。

私が…私が、召喚しちゃったから……。

今でも…まだ、さっきのコトナの叫びが、頭にこびりついて離れないの。

“私には関係無い”って……。

そう…私が、もっとちゃんとしてれば…。あんな少女を…戦争に、だなんて……」

「リリー……」

それなら、俺だって……。もっと、コトナが落ち着いてからにすればよかったんだ。

それなのに…俺が焦って話を進めたりしたから……」

「二人とも……」

その声に、ハッとされたようにジンとリリーが後ろを向く。

「二人とも……。これは、誰か一人のせいじゃない。仕方がないこと

だったんだ。

とりあえず、お前ら二人とも落ち着いたほうがいい。話はまた明日…だろ？」

イリスの言葉に少し落ち着きを取り戻した俺は、ゆっくりと顔を上げ、窓の外へと目を移していく。

「ああ…そうだな」

外では、ジン達を見守るかのように、優しい光を放ちながら、幾つもの星が輝いていた。

それぞれの思いを抱え、夜は更けてゆく…。

“力”の秘密 十謎の双子十

暖かい朝の日差しが顔を照らす。

ゆっくりとまぶたを上げると、昨日と変わらない、すっきりとした部屋が視界に入ってきた。

あっ…そっか。

私、あのまま …。

状況を理解し、ゆっくりと体を起こす。

ふと窓の外に目をやると、爽やかな風にさらされた穏やかな朝の景色が広がっていた。

そんな様子を眺め、少し自嘲の笑みをもらしながら、昨日のことを思い出す。

私がこの世界を救う……か…。

馬鹿馬鹿しい…。そんなの無理に決まってるじゃん。

それに

昔の映像が、フラッシュバックのように頭を駆け巡る。

私は、“化け物”なんだ……。

その時、突然風が強く吹き、琴奈の長い黒髪を乱れさせていく。

「ダメだよ？そんな顔しちや」

「そうだよ。ティアには似合わないよ」

その声に、勢いよく顔を上げると、そこには手の平サイズの青髪の男の子と女の子が、クスクスと笑いながら翼を広げていた。

妖精…？

呆気にとられている私を横に、二人は更に続けた。

「久しぶり、ティア」

「僕達のこと、覚えてる？」

その言葉に困惑していると、二人は顔を見合わせて悲しい笑みを浮かべた。

「そっか…。やっぱり覚えてないのね。

改めて、私はミュラよ」

「僕はケイト！よろしくね」

差し出された手に戸惑いながら手を伸ばすと、二人は嬉しそうに笑い、翼を揺らす。

そんな様子に自然と顔を緩ませると、二人は更に笑みを零す。

「やっと笑ってくれたね」

「やっぱり、ティアには笑顔が似合うよ」

『ティアには、笑顔が一番似合うよ』

ドクンッ……。

ケイトの言葉に、別の誰かの声が重なる。

突然脳をかすめた声に戸惑っていると、ミュラとケイトが急に真剣な表情となり、目を細める。

「ケイト…来るよ。あと一、二分ってとこかな？」

「分かってるよ、ミュラ。人間の気配がする」

そう言って、琴奈から手を離し、上へ浮かんでいく二人を見て、私は慌てて声をかける。

「待って…！！二人は、私のことを知っているの…？」

それにティアって……」  
「早く来て」

囁くような、優しい声が耳を通り抜ける。

「ティア…早く来て。私達とあの方が待っているわ」  
「思い出したいなら……。自分のことを知りたいなら……」

徐々に二人の姿は透けて、薄くなっていく。

「まっ……」  
「「真実は、すぐそこに」」

その言葉とともに、スツと二人の姿は消えていく。  
さつきまで二人がいた場所を呆然と眺めていると、まるで頃合いを見計らったかのようにバタバタという人の足音が聞こえ、ドアが勢いよく開かれた。

「コトナ……!! 無事か!?!」

そこには、少し息をきらしたジンが立っていた。  
ジンは琴奈の姿を捉え、ホッとしたように息を吐くと、ゆっくりと琴奈に近づいていく。

「無事でよかった…。」  
さっき、この部屋の方向から魔の気配がしたから、まさかと思って来てみたが…。何ともないようでよかった」

「魔………?」

「ああ。魔界の者が発するオーラというか…気配のようなものだ」  
そこで、ジンは琴奈の視線に疑問以外の別のものが含まれていることに気づき、少しばつが悪いように顔を逸らす。

「その…すまなかった。突然入って来てしまつて。準備が出来たら呼んでくれ。部屋の外で待っている」

そう言つて、ドアの方へ足を進めるジンを横目に、私はこっそりと息を吐く。

よかった…。思ったより普通に話せそう…。

昨日のこともあり、ジン達に会うのを気まぜく感じていた琴奈は、少し安心したような表情を見せる。

とりあえず、シャワーを浴びて着替えよう。  
ずっと制服でいるわけにはいかないし。

そう決心し、急いでシャワーを浴び、クローゼットの中に掛けられていた服から、一番シンプルな白のワンピースを手に取り、着替える。一つ、大きな深呼吸をして落ち着かせてから、ゆっくりとドアの方へ手を伸ばす。

「えっと…。準備出来ました」

琴奈の声に気づき、ゆっくりと顔を向けたジンは、琴奈の姿を捉えると優しい笑みを浮かべた。

「その服、コトナの黒髪が映えて、よく似合ってるよ。  
サイズが合っているようでよかった」

その言葉に、顔が熱くなるのを感じた。  
他の人 特に、異性から褒められた経験が少ない琴奈は、どう反応しているのか分からなくて戸惑った。

「え…あ、あり…がとう…」

やっこの思いで出した言葉に、ジンは嬉しそうに笑う。

「どづいたしまして。」

じゃあ、とりあえず朝食にしようか。ついて来て」

そう言って歩き出したジンを見て、私は慌てて足を動かす。

一定の距離を保ちつつ、ジンを見失わないようにして行く。

二、三分後に、大きな扉の前についた。

その扉の両側にいた、二人のメイドのような格好をした女の人と挨拶を交わすと、ジンは琴奈の方に体を向けた。

「ここが、食事をするところだ。基本的にはここで食べるから、覚えておいて」

その言葉に小さく頷いた琴奈を見て、ジンは扉の方に向き直す。と、同時に扉の両端にいた女性がゆっくりと扉を開く。

「おはようございます。ジン様。コトナ様」

突然聞こえてきた何人かの声に驚き固まっていると、一人の女性が近寄ってきた。

「おはようございます。コトナ様の御席はこちらです。どうぞ」

案内されるがままに席につくと、素早く料理が運ばれてくる。その料理の数々に呆気にとられ、思わず凝視してしまう。

朝から、豪華すぎ…。

こんなに食べれないよ……。

目の前に広がる料理を眺めながら、さっきまで自分がいた部屋を思い出す。

…そういえば、あの部屋もすごかったな…。

クローゼットには山のようなドレスが入ってたし。

…よくこの服見つけられたなよな。

風呂に至っては、広すぎて逆に落ち着けなかったし。

無駄にお金かけすぎだよ、この城。

あまり手を動かしていない琴奈を見て、ジンが声をかける。

「その料理は口に合わなかったのか？」

あまり食べてないようだ…」

「あつ…いえ。とつても美味しいです」

ジンの視線に気づき、私は慌てて手を動かす。

そんな私を見て、ジンは「ならいいのだが」と一言告げると、食事を再開させた。

静寂な空気の中、カチャツ…というスプーンやフォークの金属音だけが、その場に響く。

琴奈は初めて味わう料理に顔を緩ませていたが、自分に向けられるいくつかの視線に気づき、体を強張らせる。

それは、部屋の隅に立っていたメイド達のものだった。

仕事中的こともあり、あからさまにジロジロと見てはいないが、それでも昨日の噂を聞いた彼女達は、コトナのが気になってしまい、チラチラとした視線を向けてしまう。

そんな好奇心な視線に耐えられなくなり、それをごまかすかのように、琴奈は固く閉じていた口を開く。

「…私は、これからどうすればいいんですか？」

「今日は、とりあえず予言の巫女のもとへ行き、コトナの力について調べてもらおうと思っている」

「予言の…巫女　？」

力を調べるといふ言葉に心臓がドクンツと高鳴るが、気づかれない

ように平静を装う。

「ああ…。あの予言をした巫女のことだ。

この城の離れにある神殿に住んでいるんだ。

彼女なら、コトナの力について何か知っているかもしれないからな」

「そう…ですか」

静かに食事を再開させながら、私は今朝のことを思い出していた。

ケイトとミユラ…って言ったっけ、あの二人。やっぱり妖精…かな？

でも、魔界の者って言ってたし、違うのかな。

どちらにしても、やっぱりここって異世界なんだ…。

この世界に来て初めて目にする地球との違いに、改めて異世界にいるということを実感する。

それにしても…。

あの二人も、私のこと知っているようだったな…。

ふと、夢の女性を思い出す。

あの女性も、今朝の二人も、私のこと「ティア」って呼んでた…。

もしかして、それが…私の“本当”の名前　　？

それに、二人の言っていた“あの方”って…。その人が、私を待っている　　…。

速まる鼓動を抑えながら、小さくため息をつく。

どれにしても、情報が少なすぎる…。

そう、あの女性も、二人も曖昧な表現しかしていなかった。しかし、確実に私のことを知っているようだった。

三人との会話を思い出しながら考える。

そういえば、あの女性も「まだその時ではない」って言った。それに「未来で分かる」とも　　…。

とにかく、もう少し様子を見てみよう。

そう結論を出し、私は早々と食事を終わらせた。

“力”の秘密 十 大天使セシリア†

「人…ですか？」

食事も終わり、神殿へ行くための準備をしていた琴奈は、「もう一人、一緒に行く人がいる」とのジンの言葉に首を傾げる。

「ああ…。本人たつての希望でな。そろそろ来ると思っただが…」

ジンがチラツと時計を確認していると、ドアの外が騒がしくなり、少し息をきらした少女が入ってきた。

突然の登場に、ジンは少し眉を寄せながら、不機嫌そうに音のした方へ体を向けた。

「遅いぞ、リリー」

その言葉に苦笑しながら少女　リリーは顔を上げた。

「ごめんごめん。訓練が長引いちゃって」

「訓練………？」

聞き慣れない言葉にポツリと言葉を落とすと、それに気づいたりリ  
ーはパツと花が開いたように私に笑いかけた。

「そうなの。私が魔術師だって言ったよね？」

私ね、これでも生まれつきかなり多くの魔力を持つてるの。

魔力が多いとね、その分高いレベルの魔法や多くの魔法が使えるの。  
そのおかげで、とんとん拍子に出世していつちゃって。

ちよっと前からね、魔術師のある部隊の隊長を任されてて、そのの  
訓練があつてたの」

「そう…ですか」

魔術師の部隊…か。

やっぱり、それも戦いのためかな…？

だけど

そこで、ふとジンの言葉が思い出される。

どうして、リリーも一緒に行くのだろうか……？

そんな私の疑問に気づいたのか、ジンは私達の間に入りながら私の  
方へ目を向けた。

「…見ての通り、さっき言っていた人というのはリリーのことだ。

これから、琴奈の魔法の指導はリリーに任せようと思っているんだが、そうしたらリリーが『それなら私も琴奈の力のこと知っておきたい』と言い出してな。まあ、その方がこれからのことを考えると、いいと思ったから許可したんだ」

「そうだったんですか。分かりました」

本当は、いろいろとまだ聞きたい言葉が含まれていたが、今回はスルーしておいた。

今はそんなことよりも、これから調べるといふ“白い光”のことが気がなくなって仕方がない。

私には、まだ“力”があつたなんて …。

無意識のうちに手に力が入り、汗が滲んでくる。

今まで知らなかった、新たな“力”

その正体が、今から分かる……………。

「それじゃあ、行くぞ」

ジンの言葉に、顔を上げ、速まる鼓動を感じながら、私は力強くその一歩を踏み出した。

\* \* \*

カッーン……カッーン……。

静かな空間に、私達の足音だけが響く。

私達は、あれから城の離れにある神殿に来ていた。教会のような真っ白な建物の中に案内されるがままに進んで行くと、その中もまた、真っ白な廊下が続いていた。

今巫女がいる所は、“祈りの間”という、その名の通り、神や伝説の英雄である大天使セシリアに祈りを捧げる場所だという。

やっと見えてきた長い廊下の終わりに、私は顔に影を落としながらため息をつく。

私が、そんな神聖な場所に行ってもいいのかな…。

そんな暗くなる気持ちをごまかすように顔を逸らすと、思わず、足が止まった。

先を歩いていたジンとリリーは、後ろから足音が聞こえなくなったのに気づき、琴奈の方へ目を向けた。

そこには、壁の方を見て、目を見開いている琴奈がいた。

その様子を不審に思い、琴奈の視線の先を目で追ったりリリーは、顔を緩ませながら琴奈に駆け寄っていった。

「その絵、綺麗でしょ？」

「えっ……？」

突然聞こえてきた声に、ハッとしたりリリーの方を向くと、リリーはニコツと笑って、さっきまで私が見ていた方へ目を移す。

「これがね、大天使セシリアなの」

その言葉に、ドクンツと大きく心臓が鳴った。

「実はね、あの戦いの生き残りの中に元画家の人がいたの。その人が戦いの後、大天使セシリアの冥福を祈って何枚か描かれたそうよ。そのうちの一つがこれ。

大天使セシリアを祀っている神殿が造られたことを聞いた彼の子孫が、寄付してくれたそうよ。

この絵には、保存の魔法がかけられているから、当時のままで半永

久的に色あせないんだって」

そう言つて、うつとりと絵を見つめるリリーを横に、私は顔が強張つていくのを感じる。

この人が、大天使セシリア ……？  
でも、この人って……。

「そろそろ行くぞ」

前方から聞こえてきた声に、「分かつてる」と返事をしたりリリーは、今だ絵を凝視している琴奈に声をかける。

「そろそろ行こう？」

その声に、私は戸惑いながらも頷く。  
さっきまで見ていた絵に、後ろ髪を引かれそうになるのを振り切りながら、リリーについて行く。

あれが、大天使 セシリア……。  
五百年前の英雄……。  
でも…そんな、まさか ……。

だって、あの絵は…  
あの、傷ついた人々に、歌いながら癒しを与えている姿は…。

あの夢の、女性と同じものだったから…。

“力”の秘密 十巫女十

「祈りの最中、失礼する。

巫女よ、第一王子のジン＝ノアードだ。

約束通り、“異界からの訪問者”を連れて来た」

ジンがその声をかけると、少し間をあけてから、扉の奥から凜とした声が響いた。

「どござ」

その声を聞き、後ろにいた二人に目を配らせると、ジンはゆっくりと扉を開き中に入っていた。

厳重に、幾重にも施された扉を進んで行くと、白く円状に大きく開けた場所に着いた。

その円の中心に、手を胸の前で合わせ、祈りを捧げる形で座り込んでいた女性が、ゆっくりと立ち上がり、私達に目を移すと柔らかな笑みを浮かべた。

「ようこそ、おいでなさいました。

ジン様。リリー様。そして、“異界からの訪問者”コトナ様」

その言葉に、今まで後ろで黙り込んでいた琴奈が勢いよく顔を上げ、戸惑ったように口を開いた。

「どうして…名前…」

「あら」

クスクスツと小さく笑いながら、その女性は琴奈と目を合わせた。

「知らない？」

私には予知能力があるのよ。

あの予言のことは知ってるかしら？あれも、この能力があつてのことよ？」「

そう言うと、今度はジン達に目を合わせニッコリと笑った。

「では、早速“力”についてお調べ致したいと思います。

危険が伴う場合もごさいますので、お二方はどうか扉の外でお待ち下さいませ」

「しかし…」

その言葉に、予想をしていなかったジンはリリーと目を合わせると、困ったように琴奈に目を向けた。

その視線に、琴奈はゆっくりと息を吐くと、少し震えた声で呟いた。

「…私は、大丈夫です。外で待っていて下さい」

「…分かった。もし何かあれば声をかけてくれ」

そう言うと、ジンはリリーを連れて元に来た道に戻って行く。パタンツという、扉の閉じる音が後ろから響いてきたのを確認すると、琴奈はゆっくりと顔を上げ、目の前にいる女性を見据えた。

そんな琴奈の様子を見て、巫女は目を細め静かに微笑む。

「では、始めましょうか？」

その言葉と共に、琴奈はそっと目を閉じた。

\* \* \*

「しかし…大丈夫だろうか…」

扉の奥を見つめながら、ジンは一息つく。

祈りの間から出た後、事情を知った巫女の侍女達に客室か何処かに案内されそうになったが、琴奈の側を離れるわけにはいかないと、あえて留まり、今に至っている。

さっきの琴奈の様子を思い出し、心配になってくる。

何だか今日のコトナはおかしかった。

いや、正確にはこの神殿に来てからだ。

神殿に入るまでは、緊張一色という感じであったが、祈りの間に入る頃には、その顔には戸惑いの色が映し出されていた。

と、言ってもまだ会って二日であるからコトナのこととはよく分からない。

しかし今日の朝には落ち着いた様子だったから、やはり変である。

やはり、“力”を調べるということに、いろいろと思うところがあるのだろうか。

「リリーはどう思うか？コトナの“力”について」

ジンと同様に扉を見つめていたリリーに声をかけると、リリーは少し眉を寄せながら口を開いた。

「…分からないわ。ただ、あの力は人には大きすぎるものだと思うの。」

それに、いくら力が暴走したからって、詠唱なしで感情に合わせて力が働くなんて。普通、暴走したら本人でも力は制御出来ないものよ？なのに、コトナは無意識に力を制御していた。

しかもあの光、少し聖魔法とは違うように感じたのよ。

とにかく、分からないことだらけだわ」

「そうか…」

リリーの言葉を聞き、ジンは顔を扉から逸らして窓の外へと目を移した。

確かに…。

コトナの力は不可解なところが多過ぎる。

初めてコトナの力を見た、昨日のことを思い出す。

そうだ…初めてコトナの力を見た時、俺はどう思った？

あの光は、聖魔法とは、光の輝きかたが違った。

だが、もともと“聖魔法”とは、昔、神から加護を受けた人間が、天界の者の力を真似て創りだした、光属性の魔法である。

聖魔法は日常的に用いられる基本属性の魔法とは違い、威力は強いが魔法の種類は少ない。

そして、聖魔法には昨日コトナが放ったような風属性との複合魔法はない。

そう、コトナが放ったような聖魔法はあるわけがないのだ。

しかし、聖魔法よりも白く美しく輝いていたあの光は、確かに、コトナから放たれたものだった。

だが…あれは、人の放てるものではないし、力も強すぎる。そう、だから思ったのだ。

まさに天使の力のようにだと …。

そこまで考え、俺はハツとしたように息を呑んだ。

そんな…まさか……な。

俺は、外から視線を外すと、再び扉を見つめた。

一体、君は何者なんだ……コトナ。

この扉の奥にいる、美しい少女を思いながら、ジンはいつまでも扉を見つめていた。

\* \* \*

混乱している頭を、どうにか整理する。

絵のことは後回しにしよう。

とりあえず、今は目の前のことに集中しよう。

そう決心し、溢れ出た情報を頭の隅に追いやり、頭を切り替えると、ゆっくりと息を吐いてまぶたを動かし、暗かった視界を真っ白に染めていく。

視線を上へずらすと、先程と変わらず、静かに佇む女性の姿を捉えた。

改めて、じっくりとその姿を観察する。

身長は165?の私より少し高いくらいだから、170?くらいだろうか?

女性にしては高いほうだ。

腰よりやや下ぐらいまで伸びる白く長い髪の毛は、左右を半分ほど残し、上のほうで軽く編みこまれている。その髪の間から覗く瞳は、淡い紫色に輝きその女性によく似合っている。

そして、金の線が上品な模様をかたどっている白い衣を纏うその姿は、大人の落ち着いた雰囲気醸し出している。

歳は…二十歳くらいかな?

私よりも年上であることは間違いないだろうけど。

…あれ?でもそうしたら、いろいろとじつじつまが合わないよね…?確か、予言がされたのは十年前。

しかし、十歳で予言というのはおかしいし…。

また、いろいろと考え込んでみると、目の前の女性がクスクスと小さく笑い出した。

「私に何か聞きたいことがあるのかしら？」

「どうやら、小難しい表情をしていたのがばれてしまったらしい。」

そんな自分に若干呆れながら、失礼と思いつつも頭に浮かんだ疑問を口にした。

「……あなたが予言の巫女だと聞きましたが、少し変ではないですか？

予言が行われたのは十年前。しかし、今のあなたはどう見ても二十代前半にしか見えないのですが……」

私の言葉に、二、三度まばたきをすると、その女性はフツと顔を緩ませ、微笑んだ。

「そうよね。あなたは知らないと思うけど、巫女は代々神の加護を受けた者になるのよ。」

そのせいもあって、巫女は普通の人と少し年のとりかたが違ふの。

一番力が強い時期に体の成長が止まるのよ。そして、力を失った時に、寿命も少し長いのよ。

つまり、寿命の尽きた時に一気に老いて亡くなっていくの。それに、寿命も少し長いのよ。私は、二十歳で成長は止まったけど 実年齢は、きっとあなたの倍以上はあるわよ？」

さらりと言われた言葉に、内心ギョツとした。

み…見えない……。

女性に疑いの目を向けてしまったが、ここが魔法なんかが存在する“異世界”だということを思い出し、納得した。

さすが異世界。

なんでもありだよな…。

などと少し失礼なことを考えていると、ふと当初の目的を思い出し、顔を強張らせる。

そうだ。こんなことをしている場合ではなかった。

そう思い直し、緊張でピンツと背筋を伸ばしながら、思い切って口を開いた。

「あの、巫女様……」  
「ミシエルよ」

重ねられた言葉に、若干反応が遅れると、目の前の女性がゆっくりと笑いながら近づいてきた。

「私の名前よ。ミシエルって呼んでね？」

私、巫女って呼ばれるのあまり好きじゃないのよ。  
ちゃんと名前があるんですもの。だから、名前で呼んでちょうだい」

紡がれた言葉の内容を理解すると、私は改めて呼びかけた。

「では、ミシエルさん。

力を調べるとおっしゃっていましたが、どうやって調べるのですか？  
それと、それは何処まで分かるものなのでしょうか？」

『何処まで分かるのか  
これは、とても重要なことだ。』

こんなことで知られるわけにはいかないのだ。  
そうだ。あの“力”は、人に知られるわけにはいかないのだ  
…。

そんな私の想いをほかに、ミシエルはなんとでもないように答えていく。

「…“さん”もいらなかったのだけど。まあ、いいわ。

調べることにしてよね？調べ方は、巫女の力であなたの中を探らせてもらうわ。それで、あなたの力について調べようと思うの。それと、何処まで調べるかだけど…力以外には触れないように気をつけるつもりだから、心配しないで？

誰にでも、知られたくないことの二つや三つはあるものね」

そう言ってクスリと笑ったミシエルに背筋が寒くなったのを感じた。

まさか、ばれている…？

そんなはずは…。

顔には出さなかったが、内心はとても焦っていた。

しかし

ふと、ミシエルの言葉がよみがえる。

万が一、気づいてないとしても、中を調べられたらきつと分かっ  
てしまうだろう。

それに……

ミシエルの姿を思い出し、小さく笑う。

彼女なら、大丈夫だと思うなんて…な。

思い出されるのは、彼女の美しく、優しい魂の輝き。  
この女性なら、知られても危険な状況にはならないだろう。

そう判断し、決心してから自らミシエルのもとへと近づいていく。  
ミシエルの前に立ち、少し見上げて彼女を見据えると、私は軽く頭  
を下げた。

「よろしくお願いします」

「ええ。こちらこそよろしくね。

少し不快に感じるかもしれないけど、我慢してね?」

そう言って、私の心臓あたりに手を伸ばしたミシエルを見て、静かに息を吐く。

「…これから、何を知ったとしても、誰にも話さないと約束してくれますか?」

その言葉に、伸ばしていた手をピタッと止めると、ミシエルは私を

見つめ、柔らかく微笑んだ。

「安心して。絶対に、話さないわ」

意思のこもった瞳に、ホッと胸を撫で下ろすと、ミシエルの手がゆつくりと私の体に触れた。

「いくわよ」

零れ落ちた言葉に、私はゆつくりと目を閉じた。

“力”の秘密 十刻印十

何か温かなものが私の中に入ってきたのを感じた。血の巡りのように、体の中を移動していく“それ”は、思ったよりも気持ち悪いものではなかった。

“それ”はしばらくうろうろしていたが、私の左胸あたりでピタリと止まった。

どうしたのかと思い、そっと目を開け様子を伺うと、信じられないものを見たかのような顔をして、息を呑むミシエルがいた。

「ミシエルさん…?」

眩くように声をかけると、ミシエルはハツとしたように私を見て戸惑いながら口を開いた。

「何か、力を見つけたわ。

少し調べてみるけど、いいわね?」

有無を言わせないような真剣な表情で見つめられ、私の体にも一気に緊張が走る。

「お願いします」

軽く頷いたミシエルが視界に入り、再び目を閉じた。

さっきまで辺りをうろろろしていたものが、奥深くまで踏み込んでくる感じがした。

その刹那、奥から強く、温かい力が膨れ上がっていき、侵入者を拒むようにドンツと弾け、温かなものが体の外へ押し戻されるのを感じた。

えっ…と思い、慌てて目を開けミシエルの方を見てみると、そこには座り込み、自分の手を呆然と見つめているミシエルがいた。

「…えっと……」

状況がよく分からない私は、困ったようにミシエルを見ていたが、それに気づいたミシエルが私を見つめながら瞳を揺らす。

「あなたは……」。

いえ、何でもないわ。

それより、聞きたいことがあるのだけどいいかしら。

もしかして、あなたのここ 心臓のななめ上の、左胸あたりには何か刻印のようなものがないかしら?」

「え……………それって、これのこと……………」

ミシエルの様子が少し気になったが、とりあえず言われた通りに従った。

刻印 ……。

そう言われて、一つだけ思い当たる節があつた。

私の左胸 ちょうど、ミシエルが言った場所には確かに刻印のよ  
うなものがある。

羽の生えた十字架を中心に、不思議な模様が刻まれている。  
これは、いつからあるのか分からない、幼い頃からあるものだ。  
私は入れ墨か何かだと思っていたが……………。  
もしかして、力に関わるものだったのだろうか ?

服をずらし、あらわになったそれをミシエルは凝視すると、それを  
指でなぞり声を震わせていた。

「そんな、まさか……………」

少し興奮したように、強い光のこもった瞳で私を見つめる。

「失礼するわ」

その言葉と共に、急に開けた視界に一瞬理解するのが遅れた。

顔 主に目を隠していた長い前髪が、ミシエルの手により払い除けられたのだ。

突然の出来事に、反応が間に合わず、その顔を外界にさらしてしま  
う。

「あっ……」

直接顔を見られたことにより、恐怖が渦巻いていた私は、ミシエルと目を合わせることができなかった。

しかし、いつまで経っても反応のないミシエルを不思議に思い、そつと目線を上へずらすと、そこには予想とは反する表情のミシエルがいた。

私を凝視し、極限まで見開かれていたその瞳は潤み、頬から顎へ向けて一筋の涙が伝っていた。

その、今まで見てきたどの人とも違う表情に、私はかなり戸惑っていた。

見開かれた目には、蔑みや恐怖の色はなく、むしろ何か信じられないものを見たかのような 神か何かを見たかのような、そんな

様子さえ窺えた。

その清く美しく流れる涙を見つめていると、呼吸音しか聞こえなかったその場に、一つの声が響いた。

「まさか…そんな、な…あ…。あな…あなた、は…」。

そう、そうだった…のね…」

さらに声を震わせ涙を流すミシエルは、何か納得したかのように私に目を向けると、慈愛に満ちた顔でそつと私を抱きしめた。

またもやミシエルの突然の行動に固まるが、いつもの拒否反応は起こらなかった。

それはきつと、ミシエルが害のなすものではないと認識したからだろう。

あんなにも美しい涙を流していたのだから …。

そして、震えながら、しかし、力強く私を抱きしめていたミシエルは、途切れながらも、何度も何度も声にならない言葉を零していた。

“力”の秘密 十力の正体十

時が経ち、少し落ち着くとミシエルはすまなさそうに私に目を向けた。

「…ごめんなさい。取り乱したりして、驚いたでしょう？」

「ええ…まあ。」

では、分かったことを教えていただけますか？」

不思議に思うことは多かったが、今はそのことよりも“力”についてのことで頭がいっぱいである。  
緊張しながらミシエルを見つめていると、ミシエルは目を閉じ、静かに深呼吸をすると、ゆっくりと私を見据えた。

「そうね……。」

まあ、率直に言うと、あなたには“天使の力”があるわ」

「天使の…力 ？」

予想を裏切る答えに半信半疑で聞き返すと、ミシエルは「ええ」と小さく頷きながら続けた。

「…といっても、力は封印されていたわ。」

その証がその刻印。それは、天界の者が使う、力を封じるための印のようなもの。だから、現時点では力を使うことは出来ないわ。でも、少しずつ封印が弱まってきているようだから、全く使えないわけじゃないのよ。

現に、昨日力を発していたでしょう？

この神殿まで僅かながらも響いていたもの」

“封印” …。

その言葉に、そつと左胸に手を伸ばす。

これが、そのための刻印……？

しかし、私にはそんなことをされた記憶はない。いや、しかしこれは幼い頃からあったもの。単に私が覚えてないだけなのか？

それに、これは天界の者がつけたもの。地球にも、そのような者が存在しているのだろうか。もし、そうだとしても、何故私に力の封印など？

そこまで考え、ハツとしたように頭を振る。

いや、今はそこが大事ではない。

そんなことよりも、そもそも …

「私に、何故そのような力があるのですか？私は、……天使などではありません。」

それに：そんな力、本当に私にあるなんて信じられません」

私の拒むような言葉に、ミシエルは悲しげに瞳を揺らす、はつきりとした口調で答えた。

「そうかもしれないけど、天使の力があるのは本当よ。それに…今まで感じたことがないかしら。」

自分が、普通とは違う力を持っている………とかね？」

何ともないように返された言葉に、背筋を凍らせる。

そして、蘇ってくるのはかつての出来事。

頭を巡るのは、何度も言われてきた、あの言葉。

“化け物”と…。

次々と思い出されるものに、震えながらも必死に振り切るように頭を振っていると、それを見たミシエルが慌てて口を開いた。

「でも、それは封印の対象とならなかっただけで、天使の力の一部なのよ？とても素晴らしい力なの。」

力を、自分自身を否定してはダメ」

優しく、心に響く言葉に、体の震えが収まり徐々に落ち着きを取り戻していく。

そんな私の様子に安堵としつつも、再び真剣な目を私に向けた。

「いろいろと戸惑っていると思うけど、一つだけ約束してほしいの。いい？絶対にその力のことは他の人に話してはダメ。

それが例え、友達でも、恋人でも、  
国王でも。

絶対に、口にしてはダメよ。

力については、私から適当に話しておくから、もし聞かれたら、私の話に合わせてごまかすのよ」

その内容に、戸惑いながらも頷く。

もともと誰にも言うつもりはなかったが、ミシェルが言うのはもっと重大な意味を持っているかのような雰囲気を持っていた。

私の返答を聞くと、ミシェルは優しく微笑みながら私を見つめた。

「もし、何か力について知りたいことがあればいつでも歓迎するわ。私は、何があってもあなたの  
コトナ様の味方です」

そっと、紡がれた言葉に目を見張る。

今まで、他人にそんなに優しい言葉をかけられたことがなかった。私の周りにいた者は、口を開けば非難の言葉ばかりだった。それなのに、この女性は……。

「……一つ、聞いてもいいですか？」

「ええ。何かしら？」

「あなたは、どうしてそこまでしようとしてくれるんですか？初めてあった私なんかのために、どうして味方になるなんて言えるんですか？」

私の問いに、ミシエルは一瞬言葉に詰まったように瞳を揺らすが、すぐに柔らかな笑みを浮かべた。

「そうね……。理由はいくつもあるけれど、一番の理由は、あなたがあの方と同じ、美しい心を持っているからかしら」

返された言葉に、顔が小さく歪む。

「私…は、そんなに綺麗じゃありません。人を憎むことだってあるし、誰にでも平等に接することもできない。自分の殻に閉じこもってばかりの、臆病者なんです。」

私は あなたの思い描いているような、美しい心なんて持ってないんです。

どうして、天使の力を持っているのか、あなたが予言した存在が私だったのかは分かりませんが、私には……無理です。

私のような者に、この世界の行方を この世界を、望ましい未来へ導くような、そんな大役は果たせません」

そう ……きつと、そう。

万が一、本当に天使の力を持っていたとしても、きっと私には使いこなせないだろう。

それに、天使の力なんて … 私には、眩しすぎる。

“天使の力” …

それはきつと、私のような者ではなく、本当に心の美しい者に似合う力なのだ。

そう、もっと別な…

美しい、天使のような少女の …。

「 そんなことはありません」

しかし、ポツリとその場に響いた声によって、私の思考は途絶えた。

咳かかれた言葉の意味を理解できずに、私は呆然と声の主のもとを見つめていた。

「あなたは自分のことを卑下しているようだけれど、私はそうは思わないわ。」

人を憎むからと言っけれど、それは自然なことなのよ。だって感情があるんですもの。正の感情だけの人なんていないわ。人は誰でも、正とは対極な負の感情も持っているものなの。だから、美しい心を持つていれば、醜い心も持つている。……当然のこと、なのよ？

それに、大切なのはそこからよ。

人は自分の醜い部分を認めたらならないもの。だから、その部分を認めるっていうのはとても難しいことなの。

だけど、いかに自分の心に正直になって、その気持ちと向き合つか。どうやってその気持ちを解決していけばいいのか。ってね。

そうやって、前を向いていこうとすることが大切なの。

だから、自分の気持ちを受け入れて、自分の醜い部分を認めることのできるあなたは、十分美しい心を持つているわ」

そうやって、ミシエルは大輪の花を咲かせるように、柔らかく微笑んだ。

しかし、そんなミシエルとは対極に、私は脳内で繰り返されるミシエルの言葉に困惑していた。

美しい？この、私が…心が、美しい ……？

“化け物”と呼ばれていた、私の心が美しいと ……？

そんな…でも、私は…。

「それにね」

更に続けられた言葉に、ハッと顔を上げる。

「あなたは無理だつて言つてたけど …、私の予言した人物はあなたなの。」

他の人ではダメ …

あなたでないと、意味がないのよ

「っ……………!?!」

どういう意味 ……!?!

確か、召喚条件は『魔王に対抗できるような力を持った者』

その条件にあてはまる人なら、世界中を探せば他にもいると思う。

むしろ、私にはあてはまらない。私は武器も扱えなければ、武術も身につけてない。

だから、私には力なんか無いのに……………。

どうして ……?!

「…どういう意味ですか?」

私でなければならぬ理由って何なんですか?」

「 ……記憶……………」

「えっ……………?」

返された言葉に、心臓がドクンツと音をたてる。

「あなたは、自分の正体を知りたくはないのかしら ……?」

「っ……………!!!?!?」

一瞬、世界が止まった。

かけられた言葉を理解し、徐々に動き出した頭を抱えながら、私は静かに目の前の女性を見据えた。

「なぜ、そのことを知っているの……………?」

「簡単なことよ……………」

今回の予言には、あなたがとても深く関わっているということよ

コシツ……………コシツ……………

ゆっくりと近づいてくる足音に、警戒心が強まる。

汗ばむ手を握りしめながら、私を見下ろすミシェルをスッと睨む。

「予言のことは知っている。  
だけど、そのことと私の記憶に、何の関係があるというの……!!」

「そのままよ。」

あなたは、たまたま選ばれて召喚されたのではないの。  
あなたが喚ばれるのは必然だったのよ……。

コトナ様。あなたは、この世界に喚ばれる前から、この戦いの  
この世界の関係者だったのよ……。」

今、この女性は何と言った……？

この世界と私の関係……？

何…それ、私、そんなこと知らないよ…？

震え出した体を抱きしめて、乱れる呼吸を吐いた。  
震えるのを抑えながら、私はゆっくりと口を開いた。

「ど…ういう、こと、ですか……？」

あなたは、一体何を…知っているん…ですかっ!？」

「 詳しいことは言えません。」

しかし、一つだけ確かなことがあります。

…先程、コトナ様の力を調べましたが、その力とは別に、もう一つ

一緒に封印されていたものがありました。

それが、“記憶”

この記憶は、力の封印と共に解けるようになっていきます。

つまり、記憶を取り戻すには、力の封印が解けなくてはなりません。

この封印は…力を使うことに、自然と少しずつ解けていくでしょう。しかし、そのためには、予言通りの道を進んでいくしかないのです。

そう、“異界からの訪問者”としての道を……」

ミシエルの声が響き渡った後、シンツとした静寂な空気に包まれた。その永久とも言えるような時間を経て、私は震える口を動かすと、蚊の鳴くような声で一言呟いた。

「少…し、考えさせて、下さ…い……」

そう言つと、ミシエルはホツとしたように小さく笑った。

「ええ、もちろん。」

いろいろ聞いて混乱しているでしょうし。返答は後日で構いません」

「…はっ」

相手に聞こえるか聞こえないかという声で呟いた私は、重い足を無理矢理動かしながら、ミシエルに背を向けて扉の方へと足を進めた。

「あなたの返答。」

「楽しみにしているわ」

背中にかけてられたミシエルの言葉を振り切るかのように、私は幾重にも重なる扉を駆け抜けていった。

「これで、よかったですよね…?」

騒がしい、足の駆ける音が遠ざかっていくのを感じながら、ミシエルは静かに呟いた。

琴奈達が入ってくる前の、祈りを捧げるような体制をとり、ゆっくりと天を見上げる。

ドーム型の高い天井からは、朝の太陽の恵みがサンサンと降り注いでいる。

それを少し眩しく感じながらも、私はふっと顔を和らげ再び口を開いた。

「でもまさか ……コトナ様が、あなた様の ……。  
いえ、しかしこれで私も少し謎が解けましたよ。どうして、コトナ様が喚ばれたのか……。」

「そういうことだったんですね……」

ふふつと微笑みながら、私は目を閉じていつものように祈りを捧げた。

「そうですね？」

「セシリア様……」

少し余韻を残した言葉は、誰にも聞かれることもなく、静寂な空気に包まれ、消えていった。

“力”の秘密 十湖の少女十

コツ……コツコツコツ……

段々と近づいてくる足音に、俺とリリーはハッとしたりするように顔を上げた。

やっと、終わったのか…？

リリーと話し合った後、俺とリリーはずっとこの扉の前で立って待っていた。

その間に、コトナについていろいろと考えてみたが、結局答えは出なかった。

そうして、お互い沈黙の中、ようやく響いた一つの音。

その足音の正体は、はたして ……。

コツコツコツ……！！

そう思っている間に、足音がすぐそこまで迫っていた。

息を凝らし、じっと扉を見つめっていると、大きな足音とともに、バンツと勢いよく扉が開いた。

そして、そこにいたのは……

荒い呼吸を繰り返しながら、体を震わせ、少し青ざめた琴奈だった。その様子に訝しく思っていると、隣にいたリリーが慌てて琴奈に駆け寄った。

「コトナ……！？どうしたの！？」

「……た……ちや………」

「え……？」

しかし、リリーが触れる前に、琴奈はその間を通過して、何か独り言を呟きながらふらふらと足を進める。

そして数歩進んだ後、ある一点を見つめ何か一言呟くと、突然、その方向へと向かって走り出した。

「コトナ……！？」

「なっ………！？」

琴奈の突然の行動に、俺とリリーは一瞬止まるが、すぐに慌ただしく動き出した。

「ジンツ……!!どうするの!?!」

「……とりあえず、追いかけて……」

「その必要はありません」

凜とした女性の声が聞こえ、ジンとリリーは勢いよく声の元に目を向けた。

そこには、少し前に見たときと同じ格好で佇むミシエルがいた。

「巫女……。しかし……」

ちらつと琴奈の去った方向を目で追いながら呟くと、ミシエルはふわっと柔らかい笑みを浮かべた。

「突然の御無礼、お許し下さい。

コトナ様は今……少し、混乱していらっしやるのです。どうか、今少しお一人にさせてあげて下さい。

力の調べた結果については、私から説明させていただきます」  
軽く頭を下げながら発せられたミシエルの言葉に、ジンとリリーは息を呑む。

『コトナの力について』

その、ずっと知りたかった答えが、今分かる……。

少し間を置き、速まる鼓動を感じながら、ジンは恐る恐る口を開けた。

「…では、巫女よ……。」

どうであったか？コトナの力と言うのは……。」

そう聞くと、ミシエルは真剣な表情となり、その視線をジン達に向ける。その様子に、一層張り詰めた空気を巡らせると、ミシエルは重々しく口を開いた。

\* \* \*

声が、聞こえる。

私を呼ぶ、声が ……。

「ッハア…ハアハア…。」

他のものには目も呉れず、一心不乱に走る。  
ある、一点を目指して ……。

ガサツ……ガサツ……。

神殿を出た後、一直線に走り続け、今、森のようなものの中を駆けている。青々とした木々で日の光が遮られ、少し薄暗い中を駆け抜けていると、進路の先に一点の光を見つける。

自分の向かっている場所を確認すると、私は何かに誘われ、導かれるように、光の元へと足を進めた。

そして二、三分後、パツと突然明るくなった視界に少し顔を歪めながらも、ゆっくりと周りを見渡し息を整える。

ずっと走り続けていたために乱れた呼吸が、正常に戻っていくのを感じると、再び足を動かし、ゆっくりとその中心へと足を動かした。

もう一度、顔を左右に動かし、周りの状況を確認する。

辿り着いたそこは、日の光によりキラキラと輝く湖を中心とした円に開けた空間だった。

その景色に心が穏やかになる。

私は心の赴くままに、ふらふらと湖に近づくと、その中心を見つめながら湖の縁に座った。

ポーッと湖を眺めていると、湖の中心からふわりと柔らかな風が吹き、私の髪を乱して背後の森へと消えていった。

その風に、とつさに閉じていた目を開けると、私は顔を少し緩めながら口を開いた。

「私を呼んだのは、あなた……？」

顔を少し傾けながら、私は目の前の存在を見つめた。

『 私が、見えるの……？ 』

少し高い、ソプラノの音が脳に響く。

戸惑いの色を含んだ声に、私は肯定の意を伝えるように薄く笑いかける。

「ええ、よく見えているわ。あなたの姿、とても綺麗ね」

目を合わせながら返すと、驚きを隠せない様子で私を凝視する。そんな様子も綺麗だな…と、目の前の存在を見つめる。

私の見つめる先には、十歳くらいの少女が湖の上に浮かんでいた。肌は白く、薄い青色の長いウェーブのかかった髪と、大きくパツチリとしている同じ青色の瞳がよく映えている。少し小柄な体を、薄くシンプルな布で包み込んでいる姿は、一見、普通の子どもと変わらない。

しかし、それは、少し透けている体とその周りで輝いているキ

ラキラとしたオーラのような光の粒を除いたらだが……。

「それで、どうして私を呼んだの……？」

そう尋ねると、少女は言葉に詰まったような表情を見せ、視線を琴奈から外し、俯く。

「…分からない。」

ただ…私達と似た気が、とても乱れていたから。気になったの。それに、会ってみたかったの。似たような気を持っているのに、私達とは違う存在に。

そんな存在、初めてだったから…」

「…そう……」

『私達と似た気』…か……。

やっぱり、私は ……。

その言葉以来、黙り込んでしまった琴奈に、少女は多くの疑問を感じていた。その疑問を解決するために、少女はある決心をし、琴奈を見つめ返した。

『……あなたは、私を見て何も思わないの……？』

透けている体。うつすらと体に纏わり付いている光の粒。そして、口を開くことなく、相手の脳に直接語りかけるようなしゃべり方。どれをとっても、普通の人間ではないという証拠……。

それを見ても、どうして驚かないの？

自分の疑問をぶつけ、緊張しながらその答えを待っていると、琴奈はふっと笑い、少女へと目を向けた。

「人ではない存在……。

私には、それが分かればいいの」

そう言っつて、笑みを浮かべる琴奈から、少女は目を離せなかった。

この人間の少女は、先程私を綺麗と言ったが、春の暖かな風によってなびく長い前髪から覗く、この少女の容貌は、とても神秘的で私なんかよりも美しかった。

その様子に言葉を失っていると、琴奈が突然立ち上がり、森の奥へと視線を向けた。

何事かと私もその方向へ目を向けると、何分か後にガサガサという葉の擦る音が聞こえ、そこから二匹のドラゴンが出て来た。

私は、こんな場所にドラゴンがいることに驚き固まっていると、その横を通り、琴奈がドラゴンの方へと歩いていった。

それに気づき、思わず声をあげる。

『危な …!!』

「どうしたの…?」

しかし、琴奈はドラゴンが威嚇しているにもかかわらず、近寄り話し掛けていた。

そして大きいドラゴンの方を見つめ、何かに気づき手を伸ばす。

「あなた…怪我をしているのね？」

…もう大丈夫よ。すぐに治すからね……」

人語を理解するドラゴンは、その言葉に戸惑っている様子だったが、琴奈を害のある存在ではないと判断したのか、琴奈におとなしく身を任せていた。

そして、琴奈がドラゴンの腹部 血の出ている箇所を手をあてると、その部分が淡く光り出し、スツと傷が塞がっていった。

これは …!!?

その様子を呆然と見つめていた少女は、その光の正体に気づき、驚きを隠せないでいた。

あれは、“癒しの力”。  
どうして…？あれは、人が持てる力のはずがないのに……。それに、  
あの力を持てるのは …。

そして、ハッとしたように琴奈を見つめ直した。

あの気……。あのお方と同じ、優しい気…。  
まさか、あの少女は …！！

思わず息を呑み、琴奈を凝視する少女だったが、それはドラゴンも  
同じだった。

今、自分に起こったことが理解出来ず、呆然と傷があった箇所を見  
つめていた。

「大丈夫…？もう、痛く…ない…？？」

その問い掛けに、ドラゴンは戸惑いながらも礼の言葉を口にした。

『…助かった。人間の少女よ…』

「いいえ…。助けるのは当たり前よ。  
それより、あなた、どうして怪我をしたの…？」

『なっ…!?!?』

私の言葉が分かるのか…!?!?』

「…ええ、分かるわ。

私、普通の人間じゃないから……」

そう言い、少し悲しげに微笑んだ琴奈に、何か察したのか、ドラゴンは俯き言葉に詰まらせていた。

そうしていると、ドラゴンの後ろにいた小さいドラゴンが、ひよこっとな顔を出し、琴奈に近寄っていった。

『ママを助けてくれてありがとう、お姉ちゃん!…!』

そう言ってパツと顔を輝かせる子どもドラゴンに、琴奈は顔を和らげる。

「いいえ、助かってよかったわ。

それより、どうしてお母さんは怪我をしていたのかしら…?」

すると、突然子どもドラゴンが俯き、顔を歪めた。

『…僕が悪かったんだ。ママには、人間に近づいちゃいけないって

言われてたのに……迷って、人間の街に出ちゃったんだ……。それで、人間に攻撃されそうになったのを、ママが庇ったから……。グスツ……。ごめん、なさい……」

そう言って涙ぐむ子どもドラゴンに、琴奈は手をあて、ゆっくりと撫でた。

「分かったわ。でも、次は気をつけなきゃ駄目よ？  
外は、危険がいっぱいなんだから……」

そして、さらに涙を浮かべる子どもドラゴンに微笑みながら、母親ドラゴンへと目を向けた。

「さあ、あなたもこっちに来て。  
そこに湖があるから、少し休んだほうがいいわ」

『…すまない。そうさせて貰おう』

その言葉を聞くと、琴奈はニコリと笑い、ドラゴン二匹を連れて、湖へと戻っていった。

“力”の秘密 十 決意 十

「この湖付近には私以外の人間はいないから、安心して休憩できるわ」

琴奈がそう説明すると、親子ドラゴンは琴奈から少し離れた湖の縁に座り、水を飲んだりして休んでいた。

その様子を微笑ましく見ていると、私は視界の端に淡い光の粒がちらつくのに気づいた。

「…すみませんでした。突然行動したりして、驚いたでしょう?」

『い…いえ……。それはよいのですが……一つ、お聞きしたいことがあります』

そう言い、緊張の色を浮かべながらも光の粒の正体である少女は、強い瞳で琴奈を見据えていた。

そして、一拍おき、口を開きかけた瞬間、自分のものとは別の声がそれを遮るかのようにその場に響いた。

「 私の、“力”………について、でしょう?」

『っ…!…!』

まさに言おうとした言葉に、思わず息を呑む。  
私は次に続く言葉が見つからず、視線をさ迷わせていると、目の前の少女から、フツと緩んだ空気が伝わった。

「そういえば、まだ名前言ってなかったわね？  
私、琴奈。田中琴奈よ。あなたの名前は？」

突然雰囲気が変わった琴奈に、少女は戸惑いを隠せない様子で言葉を返した。

『私…は、アクアリーナ。  
この湖の精霊です…』

「そっか…。精霊かあ……。うん、よろしくね！  
アクアリーナって長いから、アクアって呼んでもいいかな？  
あ、私のことは琴奈でいいからね！」

『え…ええ。では、私もコトナと呼びますね』

「ありがとう、アクア！  
……ねえ、アクア。私の話、聞いてくれる…？」

自己紹介の時とは異なり、少し影を落としながら話す琴奈に、無意識のうちに私の緊張は高まっていく。  
返答として軽く頷くと、琴奈は「ありがとう」と薄く微笑み、言葉を続けた。

「私…ね、この世界の人間じゃないんだ……」

琴奈の予想しなかった言葉に、目を見張る。

そんな私の様子に気づかなかったのか、琴奈は目を落としながら続けた。

「私……“異界からの訪問者”っていう存在らしくてね、昨日この世界に召喚されたの。」

それで、さっき私に眠る“力”っていうのを調べてもらったの。そしたらね、私には…“天使の力”っていうのがあるんだって言われたの。

……笑っちゃうよね…？だって、私、人間だよ…？

魔法や天使なんて、そんなもの物語の中だけで…、そんなもの存在しない世界から来た、ただの人間なのに……。

私がそんな力、持てるはずがないもの……！！」

自分に言い聞かせるように、徐々に声を荒げていく琴奈。

体を震わせながら息を切らしている琴奈に、私は何と云っていいかわからず、少しでも落ち着かせようと軽く抱きしめた。

「大丈夫？コトナ……」

少しして、呼吸が整い落ち着いてきた琴奈に、胸を撫で下ろす。



それに ……！家族がいるのかどうかだって ……！！  
何も！！自分のことについて、覚えてないんだもの！！！！」

ポロポロと涙をこぼしながら叫ぶ琴奈に、アクアリーナはとても動揺していた。

あまりの深刻な事情に、何と声をかけてよいか分からずに沈黙を貫いていると、視界の端からぬっと緑色の巨体が姿を現し、琴奈の頬を伝っていた涙を舐め取るように、ペロリと舌を動かした。

突然感じた生暖かい感触に、琴奈は一瞬目を見張るが、その正体を知りその方へと顔を向けた。

「あなた…は」

『お姉ちゃんどうしたの？どこか痛いのか…？』

心配そうに瞳を揺らし、こちらを覗き込んでいる子どもドラゴンの様子に、琴奈は胸の奥から温かなものが込み上げてくるのを感じた。

「…ありがとう。優しいのね。」

私は大丈夫よ、どこも痛くないわ」

『本当…？なら、よかつたね！！』

「ええ…、本当よ」

呟くように言葉をこぼして、琴奈はそつと抱きしめるように子どもドラゴンの背中へと手を伸ばす。  
そして、再びポロツと一滴の雫が黒髪の間から流れ落ちた。

「本当…に ……。  
あちら、でも、こちらでも……、あなたたちは、私のことを心配してくれるのね…」

静かに涙を零しながら呟く琴奈だったが、その言葉の端々には歓喜の意が受け取れる。  
そうして、しばらく経ち落ち着きを取り戻すと、子どもドラゴンを離し親の元へ送って、少し顔を赤らめながらアクアリーナの方へと向き直った。

「…ごめんなさい。なんだか取り乱したりして」

『いえ…。…こちらこそ、すみません。  
その ……そんなに、重い事情があったとは露知らず、軽い好奇心でものを尋ねたりしてしまっ…』

「いえ、いいの。私が勝手に話し出した事だし。  
アクアが罪悪感を感じる必要はないわ。  
それに…誰かに、話を聞いてほしかったから…」

ポソツと小さく呟かれた言葉は、余韻を残して消えていく。そこに、

風による葉の擦れる音や鳥の鳴き添う声が重なり、静かな森に自然の息吹が響く。  
そんな穏やかな空気が流れる中、意を決したように琴奈が再び話し始めた。

「それで…その、私には“力”があるらしくて …私を喚んだ人達曰く、私に魔王を倒してほしいの…。

…でも、私は自分に戦えるような力があるなんて思ったことなかったの。

私がつっている“力”といえば、“癒しの力”と“どんな生き物とも話せる力”ぐらいで…。

そう、思ってたから。私には、そんなこと無理だって。

でも …」

目を下に向け、躊躇うように口を濁す琴奈に、アクアリーナは何が言いたいのか察した。

『…“天使の力”…ですか』

「 ええ。

…ミシエルさん 予言の巫女が言うには、今までの私の力も、全てその力の一部だったらしいの…。

…でも、まだ眠っている力があるにしても、元々私のような者に戦いなんて…、無理、だと思っの。  
でも…」

そこまで聞いて、アクアリーナはいくつか疑問を感じた。

『一つ、いいですか…？』

…コトナは、何を迷っているのですか…？自分には無理だと思うなら、そう伝えてみればよいではないですか』

“私には戦えない” そう、琴奈は何度も零していた。それが、

琴奈の正直な気持ちだろう。琴奈の気持ちは、もう決まっていた。

だから、琴奈の言葉の節々に感じた迷いに、疑問を持った。

「そ…それは…」

アクアリーナの言葉に、琴奈は躊躇するように口籠もっていたが、やがて意を決したように口を開いた。

「……………“記憶”が…取り戻せるかも、しれないの」

『“記憶”が…ですか？』

「そう…。封印されている“力”に、“記憶”が共に封印されていると、予言の巫女に言われたの…」

そう言い、そつと左胸に目を落としそこに手を重ねる琴奈。アクアリーナは、そんな琴奈の言葉に驚いていた。

### “記憶の封印”

それは、並大抵の魔術師でも簡単に出来るものではない。そういう魔法が無いわけではないが、それを行うためにはかなりの魔力を伴うため、扱える者は数えるほどしか存在していないからだ。

それに、コトナは魔法が存在しない異世界の者。一体誰が、いつ封印をかけたのだろうか？

「この封印は…力の封印と共に解けるようになっていたらしいの…。だから、記憶を取り戻すには、力の封印を解くしかないの……」

119

続けられた言葉に、目を見張る。

記憶の封印が、力の封印と共に解ける？

今存在する魔法に、記憶を封印する魔法はあるが、それは一方的にかけるだけで解除することは出来なかつたはず…。封印の解除に条件を付けるなんて、なおさらだ。

そんなことが出来るのは…。

『…コトナ。封印された場所に、何か刻印が刻まれていますか？』

「…確かに、そのようなものはあるわ。これのことでしょう？」

予言の巫女は、“天界の者がつけた”って言ってたけど……」

琴奈の言葉で、自分の仮説が正しかったことが分かったアクアリーナは、『やっぱり……』と呟き、琴奈によって曝されたその刻印へと目を向けた。

そして、その刻印を目に入れると、一瞬驚愕の表情を浮かべるが、すぐにどこか納得したようにその刻印を見つめた。

『…確かに、これは天界の者がつけたものですね。力の封印と共に解けるというのも、本当のようです』

「やはり、そうなのね……」

……だから、迷っているのよ……」

『なるほど……』

うんうんと頷くアクアリーナ。今の話で、ようやく琴奈の言いたいことが分かってきたのだ。

『つまり、コトナは記憶を取り戻したいのですね？』

「ええ……。そのためには　力の封印を解除することが必須……。でも、そんなことをしたら　……」

『もう、“戦えない”は通用しなくなる　ということですね？』

そう　それこそが、琴奈の“迷い”だった。

記憶を取り戻したい　しかし、そのために力の封印を解けば力を、解放してしまえば　、もう、“戦えない”は言い訳として通用しなくなってしまう。

召喚の条件だった“魔王に対抗出来る力”というのは、おそらくこの封印された力のことだろう。そして、その力が使えるようになってしまったら、いくら琴奈が拒否しようとも戦場へと駆り出されてしまっだろう。

そうなったら、もう後戻りは出来ないのだ。

「戦うのは怖い……。　　だけど、記憶は取り戻したいの……。

……ねえ、アクア。私……どうすればいいのかなあ……？」

『コトナ………』

刻印に手を重ね、不安そうにこちらを覗く琴奈。

そんな琴奈に胸が痛むのを感じながら、アクアリーナはそっと琴奈を抱きしめた。

『……コトナは、どうしたいのですか……？』

「えっ……？」

「戦いが怖いのは、分かります。しかし、記憶を取り戻すには避けられないこと…。」

ならば、選ぶしかありません。戦いか記憶か。

コトナ…、あなたが一番に望んでいるのは、どちらですか…  
？」

私の言葉に、地面を見つめ、暫し沈黙を貫く琴奈。そして、スツと真剣な眼差しを私に向け、ゆっくりと口を開いた。

「わ…たし、は…」

ギュツと握られた拳。

共に吐き出された、強く、決意を込めた言葉は、風と共に、深く森の奥へと溶け込み消えていった…。

## 暗躍する思惑

「……戻ったか……」

コツツ…とグラスを置いた音が、静寂の中に響く。

ふと感じた空間の歪みに、青年はその場所へと目を向け、静かに口角を上げた。

すると、その二、三分後にグニャツと空間が歪み、そこから何かが飛び出してきた。

「…はあく疲れた…。何でこんなに手間がかかるのかなあ？」

「仕方ないわよ、ケイト。」

あちらとこちらを繋ぐには、それなりの労力が必要なんですもの」

「ミュラは相変わらず冷静だね……」

分かってる、言ってみただけだから。

軽くため息をつきながら、ケイトは自分の双子の姉　ミュラを手  
ラ見した。

「…ご苦労だったな」

そんな中。

呟くようにしかし力強く発せられ、その場に響いた低い声に、ケイトとミュラは即座に背筋をピンツと伸ばしてその場に跪いた。

「ただいま戻りました。

主様の前にもかかわらず、無駄口をたたいてしまい、申し訳ありませんでした」

「そんなことは気にしておらん。

そんなことより、どうであったか？ティアの様子は」

すると、ミュラは少し俯きながら躊躇するように口を開いた。

「……やはり主様のおっしゃる通り、記憶が封じられている様子でした」

「やはり、そうか ……。

ケイト、お前はどうか？」

「…僕もそう思います。一応確認してみました。僕達のことから分からない様子でしたから……」

「そうか……」

重い、沈黙が続く。

青年は、スツと正面の大きな窓へと目を向け、暗闇の中で輝く大きな月を見つめた。

薄暗い部屋は、紅い月明かりのみに照らされ、青年の冷たく美しい容姿がより強調されているようだった。

「……………主様も、会ってみてはいかがですか？」

主様なら、ティアも分かるかもしれません」

沈黙を破るように響いた高い声に、青年は静かに口角を上げた。

「…そうだな…。」

もう少し、落ち着いてから　せめて、“覚醒”してから……………だな」

滑らかに、グラスを口元へと運ぶ。

その残りを喉に押し流すと、青年は冷たい笑みを浮かべた。

「…そうだな　…もう、すぐに」

青年の、クククツ…という笑い声だけが、薄暗い部屋の中に響いていた　…。

「そろそろ休憩にしようか」

「はい…」

その言葉にホッと息をつく琴奈。

そんな琴奈の様子に、言葉を交わした少女 リリーはくすりと笑った。

「……それにしても、コトナが納得してくれるなんて、思ってもみなかったわ」

リリーは琴奈と目を合わせ、そつと微笑んだ。

「本当に…ありがとう、コトナ。」

こんな、一方的で理不尽な要求に応えてくれて…本当に……」

「いえ…」

そう。

私が選んだ答えは“記憶”だった……。

戦いは怖い　　だけど、それでも……、自分の事が知りたかった  
……。  
だから私は、記憶を取り戻すことを選んだのだ。  
そう……すべては、自分のために　　……。

森から帰った後、私は私を待っていたミシェルさん達にその想いを  
伝えた。

もちろん、ジン達がいたので記憶のことは伏せていたが、戦いに参  
加する意志は見せたつもりだ。

少し経ち、戦いに参加するのならば、ある程度力が使えるようにな  
らなくてはならない、というジンの言葉により、王宮の隣に設置さ  
れている訓練場で、リリーによる魔法の練習が始まった。

そして、今に至っている。

「よし！それじゃあ再開しようか？」

「……ええ」

琴奈が頷くのを見て、リリーはそつと目を閉じた。そして、ボソツと小さく呟くと、目の前にセットされていた紅茶やお菓子がスツと消えていった。

何度見ても慣れない魔法に、琴奈はじつと凝視してしまふ。目を開けたリリーは、そんな琴奈の様子に口元を緩ましていた。

「まずはさっきの復習からね」

リリーはまたボソツと呟き、小さな黒板を出した。

「まず、魔法の種類について。

これはさっきも言ったけど、魔法には主に火、水、風、土、雷の五大属性、または基本属性と呼ばれる属性と、聖魔法と呼ばれる光属性のもの、他には無属性のものがあるわ。

五大属性の魔法は主に生活上で用いられ、基本的な魔法ならある程度は誰でも使えるの。料理するとき火をつけたり、水を使って洗濯をしたり、そういう小さなことに使われているわ。もちろん、五大属性の魔法にも攻撃に特化した魔法はあるけど、それは日常的に用いられる魔法と違い、レベルが高く難しいから一般の人は使えないの。

それを使うには、才能があつて、きちんと国が設立した学園で学ぶか、私のような魔術師に弟子入りして学ぶかのどちらかね。

大抵そういう人達は将来国直属の軍に所属するか民間のギルドに所属しているわ。」

カツカツ…とリリーは黒板にいろいろ書き込みながら説明をする。琴奈はその黒板を見ながら軽く頷き、頭の中を整理していた。

「次は聖魔法について。

聖魔法は五大属性の魔法に比べて、使用する魔力の量もレベルも桁違いだから、使用できる人は国に数えるくらいしかないわ。あ、もちろん私は使えるわよ？

…それと、聖魔法は威力が強いけどあまり種類はないの。それは、聖魔法自体が、天界の者が使う魔法を元に創られたからだと言われているわ。

だから、聖魔法は主に戦いに用いられるわね。日常的には……明かりをつける魔法くらいかな？使うのは」

うんうんと頷きながら、リリーは黒板に言葉を埋めていく。

「最後に無属性についてね。

転移や異空間に物を収納、取り出しをするさっきの魔法もこれに含まれるわ。

無属性も聖魔法と同じで、使える人が極端に少ないの。

無属性の魔法は、使う魔力はそこまで必要じゃないんだけど、魔法を使うときに大事なイメージがしにくいことがあって、なかなか使える人がいないのよね」

まあ、想像力って鍛えてどうこうなるっていうものでもないしね、と付け加えてからリリーは琴奈の方へ振り返った。

「ここまではいい？」

「はい……」

「じゃあ、続けるわよ」

リリーは再び黒板に向き直り、カツカツとチョークの黒板を叩く音を響かせた。

「次に魔法のレベルについてね。」

レベルとしては、下から初級、中級、上級、最上級、そして神級があるわ。

初級は、普段生活上で用いられるような魔法や、攻撃系魔法で言えば、火の玉を飛ばしたり風を起こしたりとか、単純な攻撃をするような魔法かな。

中級は、初級よりも応用を利かした魔法が多くて、その分威力も消費する魔力の量も増えるわ。

魔法で言えば……そうね。風属性を例にすると、初級が風を起こすのに対して中級は竜巻を起こしたりとかかな。

次に上級。上級は中級を更に応用させた魔法よ。

これが二、三個使えるようになれば、一人前の魔術師として認められるようになるわ。

威力が特に強いものと、一発で小さな町なら破壊できるくらいのももあるの。だから、ちゃんと制御できるようになることも大事

よ。

次に最上級だけど、これが使ええる人は国に一、二人、多くても三人いるかどうかというほど使える人が少ない、極めて難しい魔法なの。

使うには、技術はもちろん、使う魔力の量が半端じゃないの。これを使えば、よっぽど魔力が多い人でも一日は動けなくなるわ。魔力もそうだけど、強い精神力も求められるから、これが使ええる人は魔術師の憧れの的なのよ」

因みに私も使えるのよ？と誇らしげに胸を張るリリー。

「まあ、普通の人の上級が二、三個、学生なら卒業までに上級が一個使えるようになれば十分とされているから、上級や最上級が使えなくてもあまり気に病むことはないんだけどね」

パンツパンツとチョークの粉を掃いながら呟くと、リリーはクルツと振り向き琴奈に笑いかけた。

「…つとまあ、魔法についてはこのくらいかな？  
何か質問はある？」

「神級は…？」

「あ、やっぱり気になる？」

神級については…まあ、覚える必要はないんだけどね…知りた

いのなら教えるよ。

神級はね 事実上、不可能だと言われているんだよ。別に神級の魔法が机上の空論というわけではないのよ？実際に神級の魔法を創り、使用した人が歴史上に存在していたのだから。それなのに不可能とされているのはね、神級の魔法を使用するための条件にあるのよ。

その条件は “神の加護を受けていること”

神級の魔法は、天界の者から受けた加護の力を元に創られた魔法だから、神級と言うの。

その魔法の威力は凄まじく、曰く一発で国が崩壊するほどの大災害レベルの被害が出るらしいの。

神級の魔法を創った者の名は、“ジェイス・サイファード”

人魔世界大戦で、最後まで大天使セシリアと共に戦ったとされる英雄……。

彼は政府直属の特殊部隊の隊長で、セシリアに最も信用された存在だった。セシリアは彼に加護を与え、その加護の力で創られたのが神級。

でも、あの戦いの後、人間に関わろうとする者は天界にはいなかった。

……だから、加護を受けた人はそれ以降に見つかっていないのよ。

まあ、結果神級を使ったのは彼一人ということになるわね。

だから、事実上不可能な魔法とされているのよ」

「そういう、意味……ですか……」

リリーの説明に琴奈はフムフムと頷く。

国が崩壊って……一人の力で多くの人の命が左右されるなんて……。魔法って便利だけど怖いものでもあるんだな…。

改めて知った、魔法の威力に驚きと恐怖感を抱いていると、突然「あ　！！」というリリーの声によって思考を遮られた。

「使えるじゃんっ！！」

「えっ…？」

何が…？という言葉は続かなかった。

「だーかーらー！神級魔法だよ！！」

神級魔法……？

確か事実上不可能なんじゃなかったっけ…？

「だって、コトナの力って“癒しの女神の加護”なんでしょ？」

巫女様から聞いたよ、と目を輝かしているリリーに琴奈はふと巫女の言葉を思い出した。

『力については、私から適当に話しておくから』

そうか…。

そういう力ということにしたのか…。

「加護…しかも、癒しの女神といえばあの大天使セシリアの母親だよ!？」

神級魔法を創った人が受けた加護だってセシリアからのものなんだから、その血縁者の加護なら、きっと神級魔法だって使えるよ!!」

そう興奮して語るリリーに、琴奈は「そうだといいですね」と曖昧に頷いた。

正直言つて、使える気が全くしない。

実際は加護なんてもの受けてないし、そもそも魔法自体使えるかどうかまだ分からないのだ。

「と…とりあえず、初級魔法から練習してみようか」

コホンッ…と先程までの自分の態度に、興奮し過ぎたと頬を赤らめながら自重するリリー。

リリーの言葉に、琴奈は緊張気味に頷いた。

「まずは無難に、【火焰 flame】から試そうか」

フム、とリリーは頷くと、スツと右手の掌を上に向けて上げ、小さく【火焰 flame】と呟いた。  
すると、掌の上の空気が渦状にざわつきそこから赤い火の玉が現れた。

これが……魔法……。

元の世界にはなかった、世界の神秘に触れ、琴奈は異様な高揚を感じていた。

「こんな感じかな？」

コトナ、これが火属性の初級魔法【火焰 flame】よ。  
まずはこれから出す練習をしてみようか？」

そう言うと、リリーは右手を掃うように横に振り、火の玉を消した。

「魔法の出し方は ……分かるはずないよね、うん。

まずね、魔法で一番大切なのは“想像力”よ。いくら魔力を練っていても、きちんとイメージして使わないと上手く出来ないの。詠唱も本当は唱えなくても魔法は使えるんだけど、魔法をイメージしやすくするために大抵の人は唱えるわ。

まあ、初級魔法ぐらいなら唱えなくても大抵使えるんだけどね。  
…コトナは使うのに慣れるまでは唱えてたほうがいいと思うわ。  
とりあえず、してみようか？」

さっきの火の玉を思い浮かべながら、右手に魔力を練ってね、とリリーは続けた。

しかし、いざ実践しようとして琴奈ははたと思った。

……魔力って、どうやって練るの ……？  
と、いうより自分に魔力なんて有るのだろうか…？

上げた右手を見つめながら考えを巡らせる。  
が、今更考えても仕方ないと開き直り、とりあえずやるだけやってみた。

そっと目を閉じ、心を静める。

赤い火の玉を思い浮かべながら、右手に意識を向ける。

「【火焰 flame】」

……あれ…？

そっと目を開け、右手に目を向けた。

右手には赤い火の玉が …… ない。

え……？

もしかして、失敗したのかな？

チラッと視線を動かし、リリーの方に向ける。  
リリーは、私の右手を見つめて眉をひそめていた。

「あの……」

控えめに声をかけると、リリーはハツとしたように視線をそらした。

「ああ、ごめんなさい。

えっと…もう一回してみようか」

「はい……」

再び目を閉じ、神経を尖らせる。

「【火焰 flame】」

…シーン……。

重い空気が降り掛かる。

沈黙が、気まずい……。

感じる視線に、そっと目を伏せる。

重たい気持ちになり、心の中でため息をつく。

……やっぱり、私に魔法は使えないのかなあ……？

言葉にして更に肩を落としている琴奈に、沈黙を貫いていたリリーが何か思案したように口を開いた。

「コトナは……、きちんと魔力を練ってる……？」

その言葉に、琴奈は更に落胆する。

「……その、魔力っていうのがよく分からないんですけど……」

「えっ……!？」

……ああ、そういうこと……。あ、そっかあ……。

それは、困ったねえ……」

うーん……と思案するリリー。

彼女にとって、そのことは全くもって想定していないことだったの

だ。

いや、冷静に考えてみれば、すぐに思いつくことだった。

そもそも、魔力の練り方　魔法の出し方は、基本的なものは幼い頃から周りの環境によって感覚的に覚えていくものだ。だから、この世界では魔力の練り方などは知っていて　使えていて、当たり前なのだ。

そう、 “この世界” では。

しかし、琴奈は違う世界の人間。　しかも、魔法が存在しないと  
言う…。

そんな世界から来た琴奈が魔力の練り方を　この世界の常識を知らなくても、それは当然のことなのだ。  
というか、それ以前に魔力が有るのだろうか……？

そこで、ふと琴奈がこちらに来た時のことを思い出した。

白い光。圧倒的な魔力　…。

魔力は、ある。

あとは、使い方だけ　…。

「じゃあ、まず自分の魔力を感じて、感覚を掴もうか」

そう言うと、リリーは琴奈に近づき右手に触れた。

琴奈は、触れられた瞬間ビクツと体を硬直させるが、なんとか気持ち  
を落ち着かせた。

大丈夫…。これは、危険じゃない……。

「今から、私の魔力をコトナに流すね」

その言葉と共に、じんわりとした暖かいものが、繋がれた右手を介して伝わってきた。

これが、魔力……。

何だろう…何かに似てる……？

……ああ、そうだ。あの力に似てるんだ。

“癒しの力”に …。

体を回っていた暖かいものが消えたのに気づき、私はゆっくりと目を開けた。

「どう？魔力を感じる事が出来た…？」

「ええ…、まあ」

「よし。じゃあ、今感じた魔力の感覚を思い出しながら、それを右手の掌に圧縮するように集めてみて。」

あとは最初に言ったように、しっかりと魔法のイメージを忘れずに」

リリーの言葉に、琴奈は静かに頷く。

そして、一度大きく呼吸をすると、そっと目を閉じ右手に集中させながら詠唱を口にした。

「一旦休憩しようか？  
いろいろと疲れたでしょう？」

「はい…」

「じゃあ、お茶とお菓子の準備を頼んでくるから、コトナはここで待っててね」

そう言つて王宮に向かって行つたりりを横目に、琴奈は息をついた。

結局、魔法は発動しなかった。

やはり、異世界の人間が魔法を使うのは不可能なのだろうか…？

小さくため息をつきながら、チラリと右手に目を向ける。

そもそも、魔力っていうのがまだよく分からないんだよなあ……。魔力がどんなものは分かったが、自分の中の魔力を見つけることは出来なかったのだ。

そこで、はたと気づいた。

いや……。待てよ…？

魔力は分からなかったが、何か近いものがあつたような……。

ああ、そうだ……！！

「癒しの力」……」

喉から滑り落ちた小さな呟きは、静かな訓練場に響いた。

そうだ……。魔力は、癒しの力を使う時の力に似ていた。

なら、その要領で行えば、魔法も使えるかもしれない。

色付き始めた希望に、琴奈はドクンツと心臓を大きく鳴らした。

そつと瞼を下ろし、暗闇の中へと意識を落とす。

風の音が、聞こえる……。  
シンツとした空気の中、自分だけがそこに存在しているような錯覚を覚える。

空気に溶け込むように、自然と心を、体を一体化させる。  
スツと、右手を挙げる。

自然に身を任せ、体の奥から右手に向かって暖かいものを送り込むように意識を向ける。

燃える

ふっと、前方から風が通り抜ける。

「あっ……」

右手が暖かい……。

ふとそちらに目を向けると、そこには 暖かい、赤い火の玉が。

「で……出来た……」

右手の赤いものを視界に映し、息を呑む。

散々試して出来なかったのに、こつも簡単に一度で……。

何で………？

「ああ　　！！」

「ひっ…………」

な…何…………？

恐る恐る振り向くと、そこにはお茶とお菓子を乗せたワゴンを片手に、こちらを指差して固まっているリリーがいた。

「何で…………！！？」

成功してるじゃん！！さっきまで出来なかったのに…………どうしたの！！？」

興奮した口調で、語尾を荒げながらズカズカと歩いてくるリリーの迫力に、私は気圧されオロオロとしてしまう。

「ねえ、どうやったの！？」

再びぶつけられた疑問に、狼狽する。

どうしよう…………。

癒しの力を使う要領でしてみた、なんて…言えるわけないし…  
…。

「えっと……あの。  
…何も考えずに、とにかく“燃える”って言ってたら、出たん…で  
す……」

恐る恐る告げて、リリーの様子を伺うと、リリーは何とも言えない  
顔で、こちらを怪訝そうに見ていた。  
その様子に、冷や汗をかくのを感じた。

「……何も考えずにつて…、さすがにイメージはしたよね？  
…てか、もしかして魔力練ってないとか言わないよね……？」

じろじろと火の玉を凝視しながら呟くリリー。  
リリーはしばらく掌の火の玉を観察していたが、「ん…？」と何か  
に気づき、訝しげに首を傾げた。

「これ…何か違う……？  
いや…そんなはずは……」

何かぶつぶつと唱えながら考え込んでいるリリー。  
そんなリリーの様子に、私は首を傾げた。

何かおかしいところがあつたのかなあ……？

…あつ！もしかして、癒しの力を使う要領で出したから、ちょっと違ってるのか…？魔力のこととか無視して出しちゃったからなあ……。

ん ……？でもぱつと見同じだし…。

と、いろいろ考えていると、リリーから「コトナ」と呼びかけられ一旦思考を停止させた。

「なんですか…？」

「出来たところに悪いんだけど、それ消してもう一度出してくれる？  
どっという風に出したのか知りたいから」

「あ、はい。分かりました…」

言葉と共に、手を横に振るように握る。

掌の中の火の玉が消えたのを確認すると、さっきと同じように手を挙げて、心の中でそつと唱えた。

燃える

フワツと暖かみを感じ、ホツと胸を撫で下ろす。

よかった……。また出来た……。

そつと目を開け、掌の上に浮かぶ赤いものを確認すると、思案顔のリリーへと目を向けた。

「えつと……。これ…でいいですか……？」

「…ええ。ありがとう、もう消していいわよ？」

少し表情の堅いリリーに、私は不思議に思いつつもその言葉に従う。私が火の玉を消したのを確認すると、リリーは気合いを入れるように「よしっ」と漏らし、私に向かって笑みを零す。

「じゃあ、その調子で他の属性も練習しようか！」

「はい…」

「あ、でもまずは休憩ね！」とワゴンを指差しながら零された言葉に、私は無意識に口元を緩めていた。

\* \* \*

「よし、じゃあ今日はここまでにしておこうか。  
お疲れ様、コトナ」

「いえ…。ご指南、ありがとうございました……」

ペコリと軽く頭を下げた琴奈に、リリーは薄く笑いかけた。

「いいの、いいの。これも仕事の内だし。」

……それにしても、コトナは教えがえのある生徒だねえ。一日で初級どころか中級まで出来るようになるなんて、この調子でいけば神級もすぐにマスター出来るんじゃない？」

「い、いえ…そんな。」

たまたまです。……明日からもよろしくお願いします……」

からかうように、しかし本気の意を込めたようなリリーの言葉に、私は苦笑いを浮かべた。

あの後、リリーの言う通りに魔法を唱えた　　と言っても、火の玉の時のように口には出さなかったが、どの魔法も、一度で出すことが出来た。

しかも、全くと言っていいほど疲れていないのだ。

その経験を経て、実はこの調子でいけばどんな魔法でも出せるのでは…？と、思っていた私は、内心リリーの言葉にどきまぎしていた。

クスクスと笑いながら、「そんなに謙遜しなくてもいいのに」と零すリリーに、私は「ハハッ……」という乾いた笑みを漏らす。

そうして、他愛もない会話を数分続けていると、訓練場の奥　入  
口付近から、数人の足音が響いてきた。

「お……？休憩中？」

俺も混ぜてほしいな」

「イリス……。お前はさっきも休憩してなかったか……？」

「まあいいじゃねえか」と笑いながら足を進めるイリスに、遅れて入ってきた男　ジンは深くため息をついた。

そんな段々と近づいてくる足音と聞き覚えのある声に、私はチラリと目を向けた。

確か……イリスさん、とジンさん……だっけ？

少し前の記憶を辿りながらフムフムと頷いていると、すぐ隣から聞こえた「あっ！」という言葉に、ふと視線を戻す。

「もうそんな時間だった？  
…イリスごめん、すっかり忘れてた」

眉を下げ、すまなさそうに言葉をもらすリリーに、私は何のことだろうかと首を傾げた。

そんな琴奈に気づき、リリーは慌てたように頭を下げた。

「コトナもごめん！

伝えるの忘れてただけで、魔法の練習が終わったらイリスに体術を習う予定になっていたの。

ほら、魔法だけじゃなくて基礎的な戦い方も身につけておいた方がいいじゃない？」

「ごめんね？」と再度繰り返すリリーに、私はなるほど、と思った。

確かに、万が一魔法が使えない事態に陥った時のことを考えると、体術は身につけておいた方がいいと思う。

私は元々活発な性格ではなかったため、周りの同年齢の子と比べて極端に体力が劣る。また、魔法を使わずとも戦えるなら、その方がいい。

それらを考えても、体術を学ぶことは後々自分のためになるだろう。

「…分かりました。

では、イリスさん、よろしくお願いします」

こちらを向き、頭を下げた琴奈に、イリスは薄く微笑んだ。

「こちらこそよろしくね。」

じゃあ休憩………は、十分したみたいだから、早速訓練場に移動しようか？」

休憩　と言ったところで、後ろから感じた殺気に、イリスは「ハハ……」と冷や汗を感じながら続けた。

\* \* \*

「　で、どうだったか？コトナの魔法は」

スツと一口紅茶をすすり、ジンはリリーへと目を向けた。

そのジンの言葉に、同じく紅茶を飲んでいたリリーは、カチャツ…と小さな音をたててカップを元の位置に戻す。

そして、小さくため息をついて、視線を下に向けた。

「それがね……。」

さっきの二、三時間で中級まで出来たのよ……」

「ほお……。それは凄いな……。で、何でそんなに暗い顔をしているのだ？」

「うーん……。確かに凄いんだけど……。何か、変だったのよねえ……」

「まあ、確かにあの時間でそこまで出来るようになるのは異常だが……」

「……そういうことじゃなくて」

フウ……と紅茶を冷ますように息を吹き掛け、また一口飲む。

「……確かに、それもおかしいんだけど……。何か、変な感じがしたのよねえ」。琴奈の魔法は。

説明しづらいんだけど……。うーん……。性質？っていうのかな……。何か、普通の魔法と違ったのよねえ……」

リリーは、思案顔のまま、どこか遠い目をしていた。

「それに、魔法の出し方も違ったのよね……」

ぽつりと呟かれた言葉に、黙って話を聞いていたジンは、興味深そうに目を細めた。

「違う、とな…？魔法の出し方など、一つしかなかったはずだが…」  
驚きを交えたジンの言葉に、リリーは深くため息をついてうなだれた。

「分かってるわよ…」。

魔法は、体のどこか一カ所に魔力を圧縮し、イメージしながら放つ。  
…そんなこと、常識だもの。

…だけど、コトナはただ魔力を流してるだけだった。  
圧縮させて、魔力の濃度を高めたりなんかしないで、ただ、流すだけ…」

はあ…とため息をつきながら呟く。

ジンは、その呟きに眉を潜めた。

「それは…、確かにありえないことだが…、単に元々の魔力の濃度が、圧縮するときぐらい高かった、というだけではないのか…？」

「…私も、その可能性を考えたわ。コトナには加護もついてるし、ありえないことじゃないって。」

…。 だけど、濃度が高いつてだけにしては、魔法の性質？…ていうか、なんか魔法そのものが、私達が使うものと違う感じがしたの…。

…上手く言えないんだけど……」

ぶつぶつと唱えながら頭を抱えるリリーを横目に、ジンは息をついた。

「……まあ、お前がそう言うんならそうなんだろう。

それにしても、コトナは不思議だな……」。

魔法がない環境で過ごしたはずなのに、この世界の人々が一年程かけて学ぶ魔法を、たった数時間で出来るようになる……」。

しかも、無詠唱でなんだろう？

ほんと、末恐ろしいよ。

この分だと、今頃イリスの方も凄いことになってたりしてな

……」

笑えない冗談だと思いつつ、ジンは向こうにいる友人に想いを馳せていた。

訓練 十 魔武器 十

「どこに向かっているんですか？」

長い廊下を歩きながら、琴奈は軽くため息をついた。

あれからかなりの時間が経っているのだが、全く着く気配のない様子に、正直うんざりしていた。

それに、体術を学ぶとは聞いていたが、どこで行うのかは知らされていないかったのだ。

「ん…？言ってなかったっけ？」

今から行くのは、第一訓練所だよ。

さっきまでいたのは魔法訓練専用の第一屋内訓練所で、今向かっているのは体術訓練専用の屋外訓練所だよ。

訓練所は、一つ一つが大きい上に、屋内外合わせて第一から第十二まであるからな。

移動するだけで時間がかかるんだ。

すまないがもう少し我慢してくれな？」

眉を下げて、笑いながら零すイリスに、琴奈は密かに顔を歪めた。

…まだ歩くのか……。

再びため息をつきたい衝動に駆られつつも、琴奈はそっと窓の外へ

と目を向けた。

蒼く、透き通っている空。

向こうと同じ。。。

ふと、ある人物の顔が脳裏に浮かんだ。

こちらに来て、二日…。

心配しているだろうか……。

思い出すのは、あの世界で唯一、私の味方だった存在。  
気味の悪い私を、人間以外としか打ち解けなかった私を、唯一認め  
てくれた人間……。

「……さゆばあ……」

ぼつりと零れた言葉に、じわりと胸が温かくなった。

「あ、ここだよ」

前を歩いていたイリスの足音が止まり、耳に飛び込んできた低い声  
に思考の海に浸かっていた私の脳は呼び戻された。

イリスに導かれて着いた場所は、学校のグラウンドくらいの広さの場所だった。

そこをボーッと眺めていると、「よし」という声その場に響いた。

「じゃあまずは、基礎体力をつけることから始めようか。

いくら技術を学んでも、それを使いこなせるほどの体力が無ければ、意味がないからね。

……まあ、最初だから軽く二十周くらいにしとく？」

笑みを浮かべるイリスに、少し引き攣った顔で返す。

何が…？とは聞くまでもなく、イリスの言葉の先を推測してしまい、心の中でため息をついた。

元々内気な性格だったため、あちらでは自ら運動を行うこともなく過ごしていた。

その結果、私の体力は平凡以下の数値をたたき出している。

…イリスは軽くと言ったが、私の体力を考えてみると、二十周は無茶に等しい。

まあ、平均以上の体力の持ち主でも、この広さを二十周も走るのには厳しいと思うが…。

…とは思ったが、イリスが言うことにも一理はあるので、言われた通りにおとなしく走り出した。

走り出して十数分後、私はとある違和感を感じた。

全然疲れがこない…？

もうすぐ五周目に入るところなのだが、全く疲れを感じない。  
むしろ、体は軽いままで、このままあと数十分は軽く行けそうだ。

私は疑問符が多く頭を占めていたが、これもまた力のうちのだろう  
と思い、あまり深く考えずに難無く課題を終わらせた。

「終わりました……」

「あ…ああ。早かったな。」

…コトナは十分体力があるみたいだから、もっと後にするつもりだ  
ったが、もう魔武器の生成を始めるか」

「魔武器……？」

「ん…？ ああ、そっか。知らないよな」

私の反応に、イリスはふむ、と頷いた。

「魔武器はな、簡単に言うと、自分の魔力を圧縮して造り出す、自  
分専用の武器だ」

そう言い、イリスは右手に魔力を集めると、一本の剣がその姿を現  
した。

それを掴み、こちらに見せるように私の方に向けた。

「これが俺の魔武器 “翡翠”だ」

日に当たり、翠緑色の刀身がキラリと煌めく。

「魔武器は一度造つてしまえば取り出すのは簡単だ。

だけど造るのがなあ。……まあ、レベルで言えば上級魔法並だな。魔力はあまり必要ないんだが、確固たるイメージと確かな精神力、集中力、そして魔力操作の正確さが大切なんだ。

がむしゃらに魔力を注ぎ込めばいい、つてもんでもないしね。

まあ、とりあえず試してみようか」

手に握っていた剣を消してから、こちらに向かって薄く笑う。

コトナならきつと出来るよ、というイリスの言葉を背に、私は静かに目を閉じた。

「じゃあ、まず右手を前に出して そう、じゃあ、次に造る武器のイメージをしつつそこに魔力を流して」

イリスの言葉に従い、イメージを膨らませようとする。

しかし、如何せん、基本的に平和な世界で生きていた琴奈には、突然武器を想像しようにも、それはいまいち難しいことだった。そんな琴奈を見兼ねたのか、イリスはふむと頷いて口を開いた。

「…武器のイメージが掴み難いのなら、まずは“思い”をのせるんだ。  
どんな武器が欲しい 例えば、攻撃に特化した武器を、接近戦で  
役立つ武器を とかね。  
あまり具体的なものでなくてもいいから、とにかく強い思いを込めるんだ。そうすれば、自然とその思いに応えた、自分にピッタリの武器ができるから」

“思い” …。

イリスの言葉に、私はふと考えた。

私が望むことは何 ？

戦いで勝つこと ？

誰かを守ること ？

違う。

私が望むものは …。

“自分自身を守れる、絶対的な力”

そう自覚した瞬間、体の奥から右手に向かって、暖かいものが流れた。

その正体に気づいたと同時に、薄暗い世界が一瞬煌めいた。  
前方から感じた暖かみに、そっと目を開けると、右手には淡い光に

包まれた銀に煌めく、細長いものが …。

「…日本刀……」

美しく、輝く一筋の刀が その存在感で空気を奮わせて孤高な姿を曝していた。

その神々しさに、私は暫し感動で言葉が出なかったが、とある声によつてその思考が遮られた。

「剣…にはしては片方にしか刃がついてないし……初めて見る形だな。

まあ、とりあえず成功だな」

笑顔で頷くイリスを横目に、私は今だに淡く光るそれを手に取り、狼狽していた。

「えっと……、一応できたんですけど、これからどうすればいいですか……？」

「ああ、ゴメンゴメン。

えっとね、造れたら魔武器に名前をつけてあげてね。

そうすることで、武器がその姿で固定されて、次からは名前を呼ぶか、魔武器を頭に浮かばせたら出てくるから」

「名前……」

そう言われて、再び右手に視線を移す。  
暗闇の中に浮かぶ、気高い月のような、美しい 銀。

「 銀月華 ……」

ぽつりと零れた言葉に、ポワンツ…と一瞬、存在を主張するように銀が瞬いた。

暫くすると、日本刀 銀月華の周りに浮かんでいた光が消えた。  
何故か、先程よりも手に馴染む気がする。

不思議そうに、握ったり軽く振ったりしていると、少しの間じつとこちらを見ていたイリスが軽く手を叩きながら私の方に歩いてきた。

「いや〜コトナは凄いな〜」。

本当に造れるなんてね…。

召喚されたとき、かなりの魔力を操っていたから、大丈夫かなあ〜  
…とは思っていたけど、こんなにあっさりと造れるなんて、本当凄  
いよ。

これが造れば、周りから尊敬の対象になるくらい、凄い技なんだ  
けどなあ……………」

苦笑しながら話すイリスだったが、いまいち自覚のない琴奈は首を  
傾げる。

そんな琴奈の様子に、イリスはまあいいかと諦めにも近い眩きを零す。

それと、とイリスは続けた。

「…これからは、魔武器を使った訓練と基礎的な体術を並列して行うから。」

「覚悟しといてね？」

ニコリと眩しい笑顔を返されて、琴奈は顔が引き攣ったのを感じた。

訓練 十夢十

「……………はあ……………、疲れた……………」

夜も更け、やっと解放された重い体をベッドに沈める。

お風呂に入った名残で、微かにしっとり濡れた黒髪から、ほのかに心地好い香りが香り鼻をくすぐる。

イリスはあのヘラツとした態度の反面、かなりのスパルタ精神を携えた人物だった。

初めてにも関わらず、琴奈に全く手加減をしないあの態度はある意味尊敬出来る。

とは言っても、こちらに召喚されてから何故か体力諸々が大幅にアップしていたため、あれだけ動いたにも関わらず、少し体が怠いな、という程度で収まっている。

……………今まで通りなら、一体どうなっていたのか想像したくもないが。

ゴロンと仰向けになり、ふと窓の外へと視線を移した。

「月が……………大きい……………」

地球のそれとは違い、その存在を主張するかのように夜空に浮かぶ月。

それを意味もなく眺めているうちに、不思議と私の意識は白く薄れ

ていった  
…。

\* \* \*

ふと気づくと、私は広い草原に立っていた。

『ほら、あっち！』

あそこにお花が咲いているの！』

そして、勝手に動く口から発せられるのは、今よりも幼く高い声。  
その声が向けられた所には、白いもやがかかったかのように顔がぼ  
やけている少年が、一人息を切らせて立ち止まっていた。

『待ってよ、ティア！速いよ』

『…もう、仕方ないわねえ！』

ほら、待ってるから早く！！』

『ありがとう、ティア！』

“ティア”…？

もしかして、これ……私の記憶……？

視界の端に、伸ばされた自身の幼い腕が映る。

その手に掴まり、頬を紅く染める少年をじっと見つめる。

もしこれが記憶だとしたら、この少年は私の知り合い　？

しかし、思い出そうとする度に、脳が拒絶反応を起こしてしまい、意識を手放しそうになる。

『…ティア』

少年の声が再び響くと、次には完全に、私の意識は暗転した。

「ッ……!!……ハア……」

次に意識がはつきりしたときには、そこに草原はなく、あの少年の姿も見当たらなかった。

代わりにそこに広がっていた世界は、今だに見慣れない、品位のある落ち着いた部屋だった。

あれは、ただの夢？

それとも……。

「クッ…………!!」

再び感じた頭痛に、顔を歪める。

何時もそうだ。

こうやって、昔を思い出そうとする度に訪れる衝撃。

必死に思い出そうとするほど、徐々に激しくなっていく痛みに、これまでも何度も苦しめられてきた。

しかし、そんな私を嘲笑うかのように、失われた記録は白いもやに包まれたままで、少しも姿を現さない。そして、疲労だけが体に募っていく。

そう、まるで自ら表に出るのを拒んでいるかのように。

「…もう起きていらっしやるでしょうか？ 琴奈様」

軽いノックの音と共に耳を通り抜けた声に、私はハツとしてそちらを向いた。

若い女性の声だが、全く聞き覚えのない声に、無意識のうちに警戒心を強めていく。

「はい、もう起きていますが…何かご用ですか？」

「はい、少しお話があるのですが、入ってもよろしいでしょうか？」

「あ…はい」

今日の予定か何かについてかな…？

そう思いドアを眺めていると、「失礼致します」という声と共に一人の女性が入って来た。

「初めまして。私はアシユリイニミドウと申します。

本日付けで琴奈様の専属侍女として働くこととなりました。

若輩者ではありますが、どうかよろしくお願い致します」

ペコリと頭を下げ、優しい笑みを浮かべる。

そのふわりとした笑顔に肩の力が抜けた気がした。

アシユリイさんは一言で表すなら、春に咲き誇る花のような、優しく暖かな雰囲気を持った人だった。

緩くウェーブがかかった薄い桃色の髪は、胸の所まで伸び横で一つにまとめられている。

身長は少し低く童顔で、ニコニコとしている様子は一見琴奈よりも幼く見えるが、これでも二十二歳だというので驚きだ。

「まだ琴奈様はこちらに来たばかりなので、戸惑うことも多いと存じます。

なので、琴奈様がこちらに慣れるまでは、私が側に付き添ってお教え致すこととなりました。

何か分からないこと、気になることがございましたらお気軽にご相談下さいませ。

……まだこちらに来たばかりで、私のような見知らぬ者が側にいるのは不安かも知れませんが、どうかご了承下さいませ」

「いえ……！……こちらこそ、いろいろと気を使って頂いてありがとうございます」

よろしく願います、と私は頭を下げた。

「こちらこそよろしく願います。

……さて、今日の琴奈様のご予定ですが、朝食の後にリリー様との魔術の訓練、終わりましたら昼食を挟んで午後からはイリス様との体術、魔武器の訓練、そして休憩をとり、夕方からは私がこの世界の常識、礼儀作法をお教え致します。

何か質問はございますか？」

「……いえ。特にありません……」

ニコツという爽やかな効果音が聞こえそうな笑顔で返され、琴奈は軽くため息をつきながらうなだれた。

訓練 十 お出かけ 十

「っはぁ……!!」

腰を低くし、勢いよく地を駆ける。

狙いを定めて一気にそれを振り下ろした。

キンッ……!!

……だが、しかしそれは容易にふさがれ、痛手となることはなかった。

「ほら、右ががら空きですよ」

「あっ………」

カキンッ……!!

その刹那、対峙していたはずの刀は、私の手を離れ、甲高い金属音を発して後ろの方へと転がった。

それを半ば呆然と眺めていると、前方から諫めの言葉がかけられた。

「踏み込みはいいんだけどね…。やっぱりどうしても一瞬迷いが生じているんだよね。」

…まあ、これは慣れるしかないかな。

でもこれは直しておかないと、実践ではこの迷いが命に関わることもあるからね」

「はい…、ありがとうございます。イリスさん」

イリスの指摘に、私は顔を引き締めて頭を軽く下げた。

もつと動けるように、と新たな決意を立てていると、パチパチツツという手を叩く音が耳に留まり、そちらへと目を向けた。

「お疲れ様。あのイリスにそこまで動けるなんて、コトナは凄いな…。  
…まだ訓練を始めてから一、二週間しか経たないのに、コトナは成長が早くて、こつちが驚かされるよ」

「…ジン、さん」

「私もいるわよ」

「…リリー…！」

二人の登場に、自然と頬が綻ぶ。

しかし、そんな琴奈とは対照に、琴奈の言葉にジンは少しむっとし

たように返した。

「…何故、リリーは呼び捨てで、俺のことはさん付けで呼ぶんだ？」

ジンの思わぬ反論に、私は若干おどおどしながら答えた。

「そ…それは、…リリーには、と…友達は呼び捨てで呼び合っただって、教えてもらったから…」

「俺はそこに含まれないと？」

「い、いえ…！」

ただ、まだ人と親しくすることに、慣れなくて…。

…特に、男性とは…その…」

ごによごによと、言葉を重ねる。

実際のところ、今まで友達と呼べる人がいなかったため、友達という言葉にも照れを感じてしまう。

リリーにそれを告げられた時は、正直喜びよりも戸惑いの方が大きかったのだ。

友達という存在にもまだまだ慣れないのに、さらに異性とだなんて……絶対に無理だ。

「…まあいい。今は無理でも、いずれ慣れてもらうからな。」

と、そんなことより、ようやく仕事が終わったのでな、これからコトナを王都に案内しようかと思ったんだが…」

ちらりとイリスを一瞥する。

そのジンの意味ありげな視線に、イリスは肩を竦めた。

「はいはい。コトナとの時間を邪魔するなって言うんだろ？  
分かった。今日はここまでにしておくよ」

「…一言多いぞ、イリス。」

まあ、いい。…ということだ、コトナ。

これから行かないか？」

「王都、ですか…？」

“王都”は地球でいう首都のことだろう。

…ということは、やはり人が多いのだろうか…？

友達とのお出かけというものに、憧れはあった。

しかし、こんな自分にはそんなことができる友達もいなかったので、  
ずっと無理だと諦めていた。

だから、行きたいという気持ちはある。　しかし、人込みの中と  
なると別だ。

ただでさえ、今まで人に触れるのを避けてきたというのに、そんな  
所に自分から飛び込むなんて、私にはまだ無理だ。

反発しあう想いに返事に困っていると、ふと頭の上と感じた温かな

ものに、恐る恐る視線を向けた。  
視線の先には、柔らかな笑みを浮かべたジンが、包み込むように私の頭を撫でていた。

「大丈夫だ、俺が側にいるから。……だから、一緒に行かないか？」

突然触れられたことに戸惑いを感じたが、その笑顔に、言葉に、…なぜかホツとしたきがした。  
全く根拠がない言葉なのに、なぜか大丈夫だと思えたのだ。

「…うん」

だから、気づけば自然と頷いていた。

「う…わあ……」

目の前には、行き交う人、人、人。  
しかも、赤、黄、青、緑…等など、様々な髪色の人のごった返したように道を埋め尽くしていた。

ぱつと見黒髪の人はいないようだが……、さすが異世界。地球ではありえないような、実にファンタジーな光景だ。

しかし本当に人が多い。

これから、この人の波の中を通らなければならないのかと思うと、既に白旗を挙げそうだ。

これからのことを考えて、少し青白くなっている琴奈に気づいたジーンがポンツと軽く肩に手を乗せた。

「…大丈夫か？」

すまないな、王都はいつもこんな感じなんだ。  
心配なら手でも握って行くか？」

口角を上げて、少しからかい気味に出された言葉に、琴奈は顔を真っ赤にして吃り、慌て出した。

「そっ……、あの、えっ…とお………！」

「…はいはいはい。

イチヤツクのはその辺にしてくれない？

お二人さん」

「いつ………!?!」

かけられた言葉に、琴奈はさらに顔を赤く染め、若干体を奮わせた。そんな琴奈を横目に、声の主はついと鋭い視線をジンの方に向けた。

「…てかさあ。ただでさえ正体隠しても目立つ容姿してるんだからさあ、目立つようなことしないでくれない？

巻き込まれる私達の身にもなってよね」

「…そもそも何故お前達がここにいるんだ？

俺は、コトナだけでよかつたんだがな」

「ジンだけにコトナを任せられるわけないじゃない！

それに、私だってコトナと買い物行きたかつたんだもの。

皆で行った方が楽しいし」

ねっ？と隣に立つ男に同意を求めるリリーに、ジンは億劫そうにそちらに目を向けた。

「…そもそも何故お前までここにいるんだ、イリス。

部隊の訓練はどうした？確か午後から入っていたはずだが…?」

投げ掛けられた質問に、ニヤリと口角を上げて答えた。

「そりゃあ、お前、権力使ったに決まってるだろ？」

「いやあ〜皆喜んでたぜ？久々の休みだ〜…ってな

それに、俺もコトナと遊びたかったし」

へらりとしたイリスの態度に、ジンはイラッとした顔で返した。

「ちっ……まあ、いい。

……後で給料減らしといてやる。

とりあえず、そろそろ行くか？」

「ちよっ…！？」

お前、今、物騒なこと言わなかったか！？」

……っておい！無視すんなよ！！」

ぶつぶつと何かを叫んでいるイリスを置いて、ジンは琴奈を連れてさっさと進む。

後ろで「だから目立つなって行ってんでしょ！？」「という、よほどその声の方が目立つのでは？と問いたくなるような声量でつつこむリリーに、思わず琴奈は笑ってしまった。

ああ、そうだ。自分は、今までこういうものを望んでいたのだ。

何の意味もないような、馬鹿げた会話。

どこの日常にも溢れているような、そんな平凡なやり取りだけど、それができるのは、馬鹿をし合えるような友達がいるからだ。自分には、今までいなかったから…。

だけど、今はそんな光景を間近で感じる事ができる。

そんなことだけで、気分が晴れて、余り人込みも気にならなくなつた。

「ふふっ……」

顔を綻ばせ、楽しそうにしている琴奈に気づき、三人にも自然と笑顔が広がった。

「よし、じゃあまずは何処に行くか？」

「はいはいっ!!」

買い物久しぶりだし、私コトナと服見たい!」

「服か…。そういえば、コトナもいろいろと欲しいものもあるだろうしな。」

よし、じゃあ行くか」

とりあえずリリーの提案を採用し、通りを歩きながらお店を探していた。

歩き始めて十数分、ようやく気になるお店を見つけ、男二人を残してリリーは琴奈を連れ店内へと入って行った。

もちろん、「俺がコトナを誘ったのに……」というジンの弦きはスル  
ーの方向で。

「きゃ〜！これ可愛い！！  
絶対コトナに似合うよ〜」

「そ、そうかな…？  
でも、私にこの服は可愛い過ぎないかな………？」

照れつつも、嬉しそうに口元を緩める。  
そんな琴奈の初々しい反応に、リリーは琴奈をまるで小動物を見る  
かのように目を細め、抱き着いた。

「ああ、もう、コトナは可愛いなあ〜。  
大丈夫！絶対似合うから！  
これは買いだねっ」

「リ…リリーっ…！！」

わたわとする琴奈を気にせず、リリーは鼻歌を歌いながら他の服  
を見に行った。  
そんなリリーを見送り、いろいろな理由で少し疲れた琴奈は、ふと  
飾っているある一つの服に目を向けた。

「…可愛い……」

それは、淡いピンクのワンピースだった。全体的にふんわりとしていて、女の子らしいデザインをしていた。薄く花柄が胸の下辺りから裾までに散りばめられていて、裾には二段にレースが重ねられている。派手過ぎずに、どちらかと言えばシンプル目に作られたそれは、琴奈の好みによく当て嵌まっていた。

琴奈はその服の魅力に惹かれ、そろそろ手を伸ばした。

「それが欲しいの？」

が、耳元で聞こえた声にその手を止めた。

「いいんじゃない？」

それ、コトナに似合うと思うし。何より、自分で選んだ服だものね」

「えっ…と、でも、私には勿体ないし……」

「何言ってるのよ！」

大丈夫よ、私が保証するから！」

ね？とリリーに説得され、私は渋々頷いた。

しかし、内心はかなり嬉しかった。あちらでは、このような服は持っていないかったのだ。欲しいな…と思ったことはあったが、「自分には似合わない」という自己嫌悪があったため、ずっと手が出せず

にいたのだ。

ふと、リリーが大量の服を持ちレジへ向かう様子を見て、私はある事実に行き着いた。

お金が、ない……！

それに気づき、私は慌ててリリーを追った。

「…っリリー…！！」

「ん？どうしたの、コトナ？

もう少しだから、ちょっと待ってね」

「違っっ…！！リリー、私…お金……」

「お金…？ああ、大丈夫、心配しなくてもいいよ。

ジンにお金貰ってるから」

グツと親指を立てるリリーだったが、その回答に私は少し青ざめた。

ジンのお金…ということとは、この国の税金の一部になるのだろう。ただでさえ他人のお金を借りることに抵抗があるのに、それがこの国の税金などなおさらだ。

「わ、私……買わなくても、いいから……！！」

「気にしなくてもいいのよ？」

それに、このお金はコトナが使うように、っていつて買ったものだし」

「でも……それ、税金……」

「税金……？ ああ、それなら大丈夫。

これ、ジンが訓練の一つだとかなんとか言っつて、魔物倒して自分で稼いだお金だから」

それなら余計に悪いんじゃない？と思っつたが、リリーの「いいから！」という言葉に遮られた。

「とにかく、そんなこと悩まなくていいの！」

コトナに使っつてほしくて渡したのに、何も買っつてないほづがジンに失礼だよ？

それに、コトナも欲しいものあるでしょ？

突然ここに喚ばれたんだし、必要なものとかいろいろあるでしょ？」

「う、うん……」

「なら、黙っつて使っつ。

それでも申し訳ないと思っつんなら、さっきのワンピース着た姿をジンに見せてあげて？

…きっつと言っつぶから」

「うん……？…分かつた」

最後のことはよく分からなかったが、とりあえずリリーに従うことにした。

こんな感じでもその後もいろいろなお店を回り、リリーとの買い物を楽しんだのだった。

「はあく買った買った。いろいろ手に入れたし、満足だよ」

「…やっと終わったか……」

リリーの楽しげな様子に、ジンはくたびれたように呟いた。

かれこれ二、三時間、ジンとイリスは荷物持ちという名目で私達の買い物に付き合わされていた。

事実、その両手には溢れんばかりの荷物をいくつも重ねられ、落とさないように支えていた。

…二人とも、心なしかげつそりとして見える。

しかしそんな二人に容赦なく、リリーは当たり前前の如く平然として歩いている。

イリスはともかく、王子であるジンにまで荷物持ちなんてさせてもいいのだろうか……？

「…すみません。買い物楽しくて、そちらの方にまで頭が働いてませんでした。」

全ては無理ですが、いくつか持ちましようか……？」

一歩前をご機嫌に進むリリーを横目に、私は二人に目を向けた。

「いや、大丈夫だ。  
これはいつものことだからな。……これだから、あいつは来させ  
てくたないんだ」

「そうそう。リリーってジンでも容赦しないもんな。  
まあ、幼なじみだから仕方ないんだけどなあ」

ハア…とジンがため息をつき、それにイリスが苦笑しながら続けた。  
ジンは嫌そうに話していたが、私はそんな気兼ねなく付き合え  
る三人の關係に、憧憬を感じていた。

「ねえねえ！そろそろお腹空かない？  
あそこに美味しそうなのが売ってるから、皆であれ食べない？」

少し行つた所で、ふとリリーが振り返り前方を指差した。  
その指の先を辿っていくと、何かの屋台のようなものが、香ばしい  
匂いと共に佇んでいた。  
その屋台の周りでは、何人かの人々が紙に包まれた肉のようなもの  
を美味しそうにほうばっていた。

「あれは…ルディッグの肉か。  
そうだな、一旦休憩とするか。  
…じゃあ、俺とイリスが買ってくるから、コトナはリリーと待つて

るよ」

「でも……」

「いいから。それに、コトナはまだこちらのお金、よく分からないだろ？」

今日は俺らに任せとけ」

「…はい。ありがとうございます……」

今日はジン達に頼ってばかりだ、と落ち込む。

『自分のことは自分で』を今まで貫いてきた琴奈にとって、今日のように人に助けてもらうことに戸惑いと恐縮を感じてしまうのだ。それに、ただでさえ荷物持ちをさせてしまっているので、むしろ自分よりも休憩を必要としているだろうと思うのだが、ジンの言うこともあながち間違いではないので、ここはとりあえず従うことにした。

「じゃあ、少し待ってろ」

そう言い残し、去っていった二人の後ろ姿をぼんやりと見つめる。屋台があるのは少し開けた場所で、琴奈達のような買い物帰りの人々が多く居座っていた。

琴奈とリリーも、その人々に交じり中央にある噴水の縁に座り休憩をとっていた。

と、そこで少し離れた所から聞こえてきた内容に、琴奈はふとそち

らを向いた。

視線の先には、琴奈より少し年上ぐらいの二人組の女性が、頬を赤らめチラチラとある一点に視線を向けていた。

「…ねえねえ。あの二人、やばくない？」

「思っつ！超美形」。

しかも右の金髪の人、超好みなんだけど！！」

「だよね！私は赤髪の方かな？」

ねえねえ、彼女とかいるのかなあ！？」

「いやあ…、それはさすがにいるんじゃない？」

あれでいない方がおかしいって」

だよね、と笑い合う女性達につられて、私はふと視線の先を辿った。

そこには、予想通りに、髪を金に染めたジンとイリスが何か話しながら屋台の側に立っていた。

その二人の様子に、私は確かにな、と思った。

ジンの髪は、艶やかな銀から、光り輝く金にその変貌を遂げていた。何でも、銀髪は王族の証らしく、そのままでは一発ではれてしまうため、城下に下るときはいつも魔法で一般的な金へと染めるのだという。

元々年に数回ある行事、しかもある程度距離のある所からでしか国民に顔をさらしていなかったので、髪色を変えるだけで隠せ通せているらしい。

ジンはこれを余り好いていない様子だったが、金髪もなかなか似合っている、と思う。

そうしてジンをじっと見ていると、肉を受け取り、こちらを振り向いたジンと目が合う。

ジンは自分を見ていた琴奈を確認すると、ニツコリと爽やかな笑顔を振り撒きながらイリスと共に戻ってきた。

「お そ い！！」

視界にジンとイリスを確認し、買い物でのテンションが下がっていたリリーはブツクサと文句をつけた。

そんなリリーに、ジンは慣れたように苦笑しながら返した。

「遅くなつてすまないな。」

あの屋台はなかなか人気らしく、人が思ったよりも並んでいたんだ」

「…つか、自分は休んでただけなのに文句かよ」

「…何か言つたかしら？イリス？」

ボソツと呟かれた非難の言葉に、リリーは笑顔で返す。

それに若干後退しながら「：別に」と答えるイリスに思わず笑みが零れた。

「はい、これコトナに分」

「ありがとうございます」

隣に座ったジンにスイツと差し出されたものに、礼を述べつつそつと目をやった。

両手に包んだそれは、一見ただの鶏肉のように見える。

それを恐る恐る口に運ぶ。と、同時に口内に広がった肉汁とその味に、思わず呟いた。

「美味しい……」

香ばしい匂いを漂わせているその肉は、見た目よりもしつこくなくて食べやすい。味はやはり鶏肉に似ている。

そんな初めて味わう肉に、夢中になって食べていると、また先程の声が目をつり抜けた。

「やっぱり彼女いるじゃん！

しかも美男美女でお似合いだし。いいなあ」

美女…？

ああ、リリーのことか…。

確かに、と頷く。

「でもさあ、あの金髪の人の彼女って……、まさか横の人じゃないよね？」

が、しかし次に聞こえてきた単語に、体が強張った。

「横…って、あの黒髪の人？」

それはないって！雰囲気違い過ぎるでしょ」

「やっぱり？やたらと前髪長いし、何か全体的に暗めだよね。」

金髪の人の横にいると余計に目立つし、あの二人、どう見ても正反対って感じだもんね」

確かに…って言って笑い合う声に、思わず服の袖を掴む手に力が入る。

…そつだ。私、何勘違いしてたんだろう……。

『暗い』『似合わない』 そんなこと、自分が一番よく分かっている。

分かってたのに …ジンが、リリーが、イリスが この世界

が、余りにも優しく、私を受け入れるから。

ああ、この世界はあちらとは違う　…こんな、化け物の私でも、許される世界なんだって…、そんなこと、あるはずがないのに。

…今のが、普通の反応なんだ。そうだよ、ここに召喚された時だつて、皆あちらと同じ、そんな目をしてたじゃない…？

それなのに、ジン達の反応が特別なんだって分かってたはずなのに…。

ああ、自分は何て浅はかだったんだろう？

無意識の内に、何処かで期待していたんだ…こんな私でも、受け入れてくれる場所もあるんだって。

それが、単なる虚像だとも気づかずに。

「…コトナ？どうかしたか…？」

その声に恐る恐る顔を上げると、心配そうに眉を下げてこちらを覗き込むジンと目が合う。

「い…いえ……。大丈夫、です…」

「本当か？随分顔色が悪いぞ？」

思わず目を逸らし、視線を落とす。

…よかった。やはり、先程の会話は聞こえてなかったようだ。

聞こえていたら、ジン達は優しいから、それがいくら本当のことだとしてもきつと私のために憤然としていただろう。

でも、そうしたら次はジン達が悪く言われるかもしれない。それだけは、避けなければならぬから…。

そもそも、あの女性達と私達との距離はそれなりに離れている。だから彼女達もまさか本人に聞こえているとは思っていないだろうし、本当なら聞こえるはずがないのだ。

それでも私に聞こえたのは、こちらに来てから上昇した、異常な身体能力のせいだろう。

召喚の産物として役に立てていた能力だったが、ここに来て始めてその存在に嫌悪を感じた。

こう言われることは分かっていたが、…せめて、今日が終わるまでは待っていてほしかった。

気づいてしまったからには、もう、今までのように軽々しく振る舞うことはできなくなるだろうから……。

そんなことを考えて落ち込む琴奈とは裏腹に、ジンはそんな琴奈の反応に眉を寄せ不機嫌そうに返した。

「…何だ。俺に言えないことがあるのか？」

いつもよりも低く出されたそれに、私は慌てて口を開く。

「いえ……！そういうわけではないのですが、……その……」

ちらりと視界の端からは、あの女性達の視線を痛いくらいに感じる。その視線を気にしつつ、琴奈はどう答えてよいのか戸惑っていた。

が、ジンはそんな琴奈の様子に気づき、視線を広場の奥にやる。そして、「…なるほど」と呟くと、今だ目を泳がせている琴奈の手を引っ張りながら立ち上がると、いつもの口喧嘩をしているリリーとイリスに顔を向けた。

「リリー、イリス。今から別行動だ。  
俺はコトナと行く」

「えっ…その……！」

突然手を握られたことに、琴奈は顔を真っ赤に染めて上手く言葉が話せていなかった。

そんな琴奈とジンを認め、ようやくこちらに気づいたリリーは、二人の繋がれな手と反応に、ニヤニヤとしながら返した。

「ふうん、まあいいんじゃない？」

こっちにはイリスがいるから私は困らないし。

二人で楽しんできたら？」

「なっ…！？まさか、ジン、お前逃げるきか！？」

俺だけに、リリーの買物荷物持ちという地獄を押し付けて、自分分はコトナと楽しんでくるのか！？」

「ということだから、こっちは大丈夫よ」

「…分かった。では、また後で」

リリーの返事を確認すると、ジンは今だ混乱中の琴奈を引っ張り、広場を後にした。

もちろん、イリスの「裏切り者ーっ！」という言葉は聞き流して。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5044t/>

---

t e a r ~ あの日約束 ~

2011年9月1日02時35分発行